
ブレイドガンナー ~ 転生少女の冒険譚 ~ (仮)

小鳥遊 輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイドガンナー〜転生少女の冒険譚〜（仮）

【Nコード】

N4090U

【作者名】

小鳥遊 輝

【あらすじ】

少女は死に、違う世界で新たな生を受けた。って、意味深な言い方をする必要あるのかな……。まあ、いいか。私は柏葉茉莉です。あ、今はアリアだった。いいかそんなことは。で、私は友達を助けて死んじゃいまして、異世界で新しい命を受けたんですね。まあ、いわゆる“転生”ですね。でも、チートな力とかは全くもらってませんよ？そんな私がその世界の後の歴史に伝説とまで言われる青年と出会い、その青年と共にたくさん仲間と共に冒険をします。それだけの物語。ほんとにそれだけの物語ですよ？ 題名は変わるか

もしれません。

登場人物（前書き）

とりあえずアリアとヴァンの名前をば

Fate風にしてみます。

登場人物

アリア（柏葉茉莉）

真名：アリア^{ハーフヒューマン} スカーレット^{ハーフヒューマン} レヴァンティア（柏葉茉莉）^{かしわはまつり}

種族：半人間・父：人間・母：エルフと翼人のハーフ

母親の血を濃く引いている。腰の辺りに翼があるが大きさを自由に換えられる。

年齢：18歳

性別：女

身長・体重：155cm 50kg

属性：秩序・善

ステータス：筋力B+ 耐久C 敏捷B- 魔力A+ 幸運B-

宝具

得意属性：雷・氷・炎・闇

ヴァン

真名：？

種族：？

年齢：20歳

性別：男

身長・体重：175cm 70kg

属性：中立・中庸

ステータス：筋力A 耐久B+ 敏捷B+ 魔力C+ 幸運C+

宝具

得意属性：強化・氷

登場人物（後書き）

完全じゃあないですね…。
とりあえず順次更新で

使用された魔法等（前書き）

劇中で使用された魔法についてです。

「2011/07/28」追加しました。

使用された魔法等

ヴォルティクスランス

属性：雷

威力：弱〜中

対人数：1（敵が重なっていたりすると貫く為複数になることも）
解説：雷の槍を精製する魔法。連発性は矢に劣るが、威力は勝る。

エクスプロージョン

属性：無し

威力：元となる魔法による

対人数：10〜20

解説：追加呪文。アリアが開発した魔法公式で、使用されている魔法のMana構成を瓦解させ、Manaに属性を持たせたまま弾けさせる技術。威力が使われる魔法にもよるが基本的に魔法を何かの形に固定して放つといった魔法にしか使えない。

ちなみにこれは追加呪文としてのエクスプロージョンの効果であり、炎の魔法にエクプロージョンがあるが、まったくの別物である。

コキュートス

属性：氷・殲滅

威力：強

対人数：大多数

解説：殲滅魔法。広範囲に絶対零度をばら撒く魔法。これを受けたものは凍りつき、かろうじて免れたものさえ足を地に縫い付けられ行動を制限される。

フラッシュフルード

属性：水

威力：中

対人数：10～20

解説：水の塊を作り出し、鉄砲水のように打ち出す魔法。威力は高いが魔法としての能力は低い。その理由は相手に致命傷を与えずら
いからである。

サンダーボルト

属性：雷

威力：中

対人数：10～20

解説：雷を落とす。威力は高いが屋内での使用ができないため使い
勝手は悪い。

第00話「どつちやら私は死んでしまっようです」(前書き)

懲りずに投稿です。

この作品はすでにそれなりに書いてありますが投稿はゆっくりするつもりです。

ほかの作品ともどもうまく書けるかわかりませんがどうぞよろしく
お願いします。

第00話「どうやら私は死んでしまっようです」

はじめにお聞きします。

皆様は転生という言葉をご存知でしょうか？

簡単に言いますと今の自分の記憶等を持ったまま違う人物になり生き返ったりすることなんです。特にネット小説などでは死ぬはずではなく死んでしまい、神様からチートな能力をもらって転生とかよくありますよね。

考えてみると神様とかいるのかという疑問が私にはありますから、もしも死んで転生することになっても私には100%チートな能力は宿らないでしょうね。

まあ、でも憧れはあるんですよ。だって、違う世界でかつこよく活躍できるんですよ！最高じゃないですか！ああ、考えるだけで幸せになれるよ〜。

おっと、いけないいけない。話がずれましたね。

そんなわけで私にはいろいろあるわけですよ。そんなわけで、まずは始まりの物語を…。

私が死んでしまい、記憶を持ったまま違う世界へと誘われそこで巻き起こす様々な物語を語りたいと思います。

まあ、先ほど申し上げた通り私には特殊な能力の一つすら与えられなかったんですがね。

* * * * *

私は柏葉茉莉^{かしわはまつり}です。今年で17歳の女子高生です。ちなみに二年生です。

身長は160cmくらいで体重は秘密です。スタイルはぼん！きゅっ！ぼん！とまではいきませんがそれなりにいいですよ。髪は黒髪をポニテにしてあります。生粋の日本人なので髪も目もなんの面白みもない黒ですね、ハイ。

まあ、そんな感じの私ですが今は、学校の授業中です。まあ、成績は常にトップを維持してますし問題はありません。っていうか私にとって今やってる授業は退屈です。

父が有名な大学の教授でして、母はそんな父のようになりなさいと中学までに大学レベルの問題まで余裕で解けるようになりました。

というわけで、授業は聞いてなくてもほとんどわかっていますし、問題をあてられない限り何の問題もありません。

父母ともに放任というわけではないですが大学まで普通に進学さ

せるつもりのように今では、高校にいるわけです。まあ、私はその方が気楽で素晴らしいんですけど。

ふと、気付いたように授業をやっている教師の言葉に耳を傾けるとどうやら自分の好きな三国志の話しているようでその声は弾んでいますね。この教師もこれさえなければいいのにといわれるたぐいの先生なんだよね。もったいない。

先生が「おっと、話がそれてしまったな」とか言って授業を再開し少し進めたところでチャイムが鳴った。

「もう、終わりか。では、これで終わりにする。当番礼を」

「きりーつ。礼」

『ありがとうございます』

「おお、じゃあな」

そう言っただけで先生はフェードアウトしていきました。

で、今のチャイムで昼休みに入ったわけで皆様いろいろあるようで既に教室には半分くらいの人しかいませんね。

私はお弁当を持ちつつ、隣のクラスまで行きます。

ついたところで私は声をあげて目的の人物を呼びました。

「未羅さ〜ん。どこですか〜?」

「はい、今行くから待っていてください」

そう答えられたのでしばらく待っていると、大きな重箱を持った小さな女の子が出てきました。

「お待ちせです。茉莉さん」

「ううん。そんなに待ってないから気にしないで。ところで他のは？」

「みんな先に言ってると思います」

「そだね。じゃあ行こうか」

私はそう言って、隣にいる小さな女の子と一緒に階段を上り始める。

ああ、この小さな女の子は杉浦未羅ちゃん（ゆま）。たまたま知り合ったおんなじ趣味の子で私の親友。私にはもったいないくらいのもいい子なのよ。

階段を登り切り、屋上へ出てみるとすでに目当ての人物たちは揃っていた。

「遅いじゃないか、柏葉氏と杉浦氏」

「あなたたちが速いの」

「そういつなつて、確かに俺たちが早すぎたんだよ」

「そうは言つがギルバート氏」

「そうですね。僕としましてはそんなことはいいんで早くご飯を食べたいんですが」

最初にしゃべったのは柿崎^{かきさき}げんた。常に頭にバンダナを巻いていて結構クールなお人です。

次に厳太君をいさめたのがギルバート。レクティファール。彼は、留学生ですが母親が日本人で日本語はそれはもう超うまいです。ちなみに父親はアメリカ人で父親に似たみたいでどう見ても外国人です。まあ、国籍は日本にないので外国人なんですが。

最後にしゃべったのが、水鳥^{みづりずすか}涼歌。超可愛いです。ちなみに短髪でボーイッシュなお方で自分のことを僕って僕っていう僕っ娘です。

ちなみにこれがどんな集まりかといいますと、オタクの集まりなんです。

アニメ研究会という名のオタクの巣窟の住人で同学年で仲がいい集まりなんです。

先にも申しました通り私の親は意外と寛容なんでこんな趣味を受け入れてくれます。

まあ、そんな人たちで集まって昼を食べてるんですよ。

「で、厳太君は何で未羅をおいて先に行ってるんですか？」

「杉浦氏に言われたからだな。柏葉氏を待つというので先に行かせてもらった」

「そうなの？未羅？」

「うん…。だって茉莉さんと一緒に行きたかったから…/ /」

ああもう。なんてこの子は可愛いのかしら。鼻血でちゃいそつ。出ないけどね。

「わかったわ。じゃあ食べましょう」

そうして、みんなアニメやらの話をしながらご飯を食べる。

ちなみに未羅は結構なお嬢様でお弁当はいつも重箱だ。当然食べきれるはずもないが、私たちみんなで食べることをわかって未羅付きのメイドさんがこれにしてくれている。

そんなわけでみんな突っつきながら食べる。

食べ終わると、みんなで部室に移動して談笑。その後、何事もなかったように教室に戻った。

教室に戻って授業を受ける。ちなみに私は1組で未羅と巖太君が2組でギルが3組で涼歌が4組。だから、授業中は基本的に一人だし、教室内で私に話しかけてくる人はほとんどいないし、ちよつとばかり寂しい。友達は一応いるけどね…。

そんなこんなで放課後となり、部室に向かう。

まあ、行ったとしても、不毛な会話をして一日の大半を終える。

たまに、自主制作のアニメを作ったりしてるとはなかなかな上手くないから最近あまりやってない。稀に傑作クラスのものができたりすることもあるのだそう。けれども、しょせん趣味の範囲ですから期待はしません。

やっぱり、そんなこんなで下校。

未羅と一緒に帰ることの多い私は、今日も未羅と帰ることとなった。

ほかの3人は方向が逆なので町に繰り出さない限り下校で一緒にはない。

連れだつてしばらく歩くと未羅が話しかけてきた。

「ねえ。茉莉ちゃん」

「ん？どうしたの未羅？」

「ううん。やっぱりなんでもない……」

「気になるじゃん。言いたいことがあるなら言っちゃってよ」

未羅は答えずらそうにしている。私は答えを聞くために顔を近づけた。

「親友でしょ？」

「そうだね……。茉莉ちゃん。今日はなんだかとても嫌な感じがするの……」

「どゆこと？」

「何かね…。何となくだけど、大切なものを失うようなそんな感じ…。」

「ふうん…。杞憂でしょ。」

「そうだといいのだけれど…。」

私は未羅を元気づけるために言った。

「何かを無くしたって私がそれ以上のものをあげるよ。大切な親友の悲しそうな顔なんて見たくないしね。」

「ありがとね茉莉ちゃん…./。」

照れたように顔を赤くする未羅。ああもう。この子はほんとにかわいいなあ。

そうして、一緒にまた歩き出す。

しばらく歩いて行くとわかれ道でそこで私は未羅と別れる。

だけど、今日の別れは何となくだけど惜しく感じていた。だから、少しの間そのわかれ道で話し込んでいた。

しばらく、話をしてネタが尽きた所で

「ん〜、じゃ。もう帰るね。」

「うん。じゃあね茉莉ちゃん。また明日」

「うん。また明日ね未羅」

私は先に帰ると言いながら未羅を見送っていた。

その時、未羅の方に向って大きなトラックが突っ込んできているのが見えた。

「ちよ！」

思わず走ったね。運動音痴な私だけどここの距離ならきつと間に合う。

そう思って突っ込んだんだけど馬鹿だね私。だって運動音痴なんだし。

私は未羅を突き飛ばしてそのまま、こけてしまった。

しまったって思ったよ。でも、もう遅かった。目の前には大型トラック。

ごめんね、未羅。また明日って約束したのに…。

そうして、私の体は吹き飛ばされ、意識を失った。

* * * * *

意識が朦朧とする。おそらく、私は死んだのだろう。だって、あんなスピードで突っ込んでくる大型トラックにはねられたんだよ？ 死なないわけないって。

ぐわんぐわんとする頭の痛みを抑えつつ私は現状を確かめる。ここが死後の世界ならきつと、私は天国に行けるね。まあ、希望だけ。

まあ、結局私は、どうやら死んでしまったようです。

親友を救って死んだんです後悔はありません。でも、未羅はきつと自分を責めちゃうだろうな。まあ、そこはみんなに期待で泣きやませてあげてね。

で、ここはどこなんだろ？

確認をしようとするが手足は動かないし、声も出ない。一体ここ

はどろっ？

そう思っていると、なぜだか急に動かなきゃいけない気がして、動いてみた。

しばらく動いていると光が見えた。

そして、

「おびきや〜」

……………。どうやら、私はいわゆる“転生”をしてしまった模様です。誰か助けて……………。

第00話「どつちやら私は死んでしまつております」(後書き)

どうだったでしょうか。

感想等ありましたらよろしく願ひします。

第01話「冒険者になりました」

この大地、　ヴァルテスト　に生を受けて18年が経った。

ヴァルテストはいわゆる異世界というやつで魔法も魔物もいるような世界だった。びっくりだね。

それで、私こと、柏葉茉莉はめでたいのかはわかりませんが転生して、この地で生きています。

ちなみに、今の名前はアリア＝スカーレット＝レヴァンティア。

どこにでもあるような商家の次女として生を受けた私は、特にすることもなくだったのでやっぱり勉強をしていた。物心なるものは新たな生を受けた時点ですでに持っていたわけですから。

生まれてからしばらくは、家の中の観察、まあ、動けないしね。ちなみに夜泣きなんてしなかったらうちの子は静かでね〜なんて言っていた。

2カ月もした頃にはすでに言語を覚えようとしていた。両親の会話や兄や姉の会話を聞きここが私の知っている場所じゃないんだとはわかっていたので、まずは言語と思い覚えようとした。まあ、3カ月くらいで言語をほぼマスターしたね。以外とかかったけどこれでいろいろ覚えられると意気込んだ。

生まれて半年後には立つて見せた。両親は驚いていた。まあ、その時にはしゃべろうと思えばしゃべれたんだけどさすがにやばいと思っっちゃべるのはやめた。

一歳の誕生日の頃には家族がちょっと出かけてる間にこっそりと難しそうな学術書を読みあさった。

三歳になる頃には、この世界のことを理解してどうやって生きていくのかを考えた。家にあった学術書はほぼすべて読み終わっていたし、やることもないから外に出ては怒られた。この頃には魔法で身体強化をしていた。この頃の私の体はちょっと弱くてね。

六歳になったころに学校らしき場所に入れられた。正直、めんどくさかったが両親は私のことをものすごく可愛がってくれていたし、期待にも答えなかったから、ちょっと頑張りすぎた。この頃には、同じ年齢の子たちとは天と地ほどの知能の差ができていた。ちなみに運動はかなりできるようになった。でも魔法で少し躓いた。まあ、すぐに克服したけど。

一二歳。どうやら学校のシステムは地球と同じらしく六年で初等部が終わった。ちなみに、学校に入ったころ運動も勉強もものものすごくできる神童と呼ばれていた。まいったね。まあ、最初のころ頑張りすぎたのがいけなかったね。その後は抑えつつも一二歳までなった。

さて、ここで問題が起きてしまった。どうやら、完全に学校のシステムは同じではないらしく、そこからさらに六年間、上級の学校に行かなければならなかった。しかも、その頃には、自分がどのよう to 生きるのかを考えるのが当たり前らしく、入る上級学校によって専門が違ったらしかった。まあ、せっかく、異世界に転生したんだし楽しもうと思っ て戦闘形の方へと私は進路を決めた。

それから、六年は必死こいて戦闘訓練をこなした。やっぱり、転生前の記憶が残っていて運動がやっぱり苦手な部分がネックになっ

ちゃった。まあ、一年で克服して学年トップクラスの成績だったけど。もちろん筆記は満点ね。魔法もね。まあ、覚えられる範囲で覚えただけ。ちなみにこの六年間で授業そっちのけでかなりの魔法の論文を書き上げた。筆記試験は初等部のときにはほとんど勉強し終えたので問題はなかったよ？

で、無事その六年を終えて私は18歳になった。ここで、また選択だ。両親からは家のためになんたらかんたらとは一切言われてなくてむしろ自由に生きてくれと言われた。方針なのか放任なのかはつきりしないけど。で、私に与えられたのは、『国の騎士団に所属する』か『冒険者になる』かだった。

もちろん、冒険者になることを選んだね。私にはその方が合ってるしね。何かに縛られるのは嫌いだしね。

ってなわけで今は、卒業式でその後は家でパーティーです。

翌日にはギルドに行つて登録を済ませて冒険者になります。

ああ、明日が楽しみ！

* * * * *

翌日。朝起きて、リビングに向かう。

リビングには既に家族がそろっていて、「ご飯ができるのを待っていた。」

「おはよう」

「おう、おはようアリア。よく眠れたか？」

「はいおかげさまで」

「そうか」

話が終わると私は席につき、「ご飯ができるのを待つ。その間に姉や兄と話をする。」

「今日旅立つんだろ？」

「うん、そのつもり。いつまでもダラダラしてたら迷惑だし」

「そんな迷惑なんてないわよ。あなたは私たちのかわいい妹だし」

「うん。でも、いつまでもいるときっと決心が鈍っちゃうから」

「そうかもな」

「でも、いつでも帰ってきていいんだからね」

「そうだけ、アリア。俺はこの家を継ぐし、姉貴は学校の講師だ。基本的にはこの街にいるつもりだよ」

話しているうちにご飯ができたのかすでに並べ終えられていて次に聞こえたのは母の声だった。

「そうよ。あなたは私たちの大事な家族だもの。いつでも帰ってきていいのよ」

そう言われて思わず涙が出た。

「ご飯を食べ終え、部屋に戻り着替える。昨日、卒業記念にと買ってもらった装備一式だ。結構、かっこいい感じになった。特に黒コートは最高に生えるね私美人だし。」

ああ、ちなみに私の身長やスタイルは転生する前とほとんど変わらなかった。でも、髪は銀色で目は蒼でそれはもうかっこいいのなのって。やっぱりポニテだけだね。

着替え終わり武器を腰に差す。剣と銃。銃はほとんど護身用。まあ、私としてはもっと他にいい武器があったらそれにしたんだけどね…。まあ当面の目標も決まってるし、私の武器探しと人生をしに行こうかな。

家を出ようと玄関まで行くと妹が待っていた。

「アリアお姉ちゃん。もう行っちゃうの？」

「ごめんね…。でも、ここは私の家だからたまには帰ってくるよ」

「うん。でも、私お姉ちゃんみたいに冒険者さんになるの」

「そうなの？ならがんばれ」

「うん！」

そう言っただけで玄関を出る。やっぱりというべきか家族全員が待っていた。妹もすぐにその中に加わる。

『いつてらっしやい！』

みんながいつせいにいう。だから私も元氣良く返した。

「うん！行ってきます！」

今生の別れじゃないけどね。

そんなわけで私は今ギルドの前に来ています。

女冒険者の数は少ないから目立つたのことで男っぽい服装にしたんだけど普通に女ばかった…。まあ、女なんだけどね。

意を決して入ってみると中にいた人たちが一斉にこっちを向いた。ビクッとなったけど、皆さんすぐに会話に戻って行った。

受付まで言っただけで私はこう言った。

「ギルドへの登録お願いします」

私はこうして冒険者となった。

でも、このことにより多くの出来事を巻き起こすこととなった。
った。

第01話「冒険者になりました」(後書き)

取りま2話まで。

第02話「出会ったのは不思議な青年だった」

「ギルドへの登録お願いします」

「はいわかりました。ではこちらの登録書の記入をお願いします。その際、誓約書の内容をよく読んでおいてください」

「はい」

そういうわけで、今私はギルドの登録に来ています。冒険者として名乗るにはギルドへの登録は必要不可欠です。しかも、発行されるギルドカードなるものは身分証明書にもなるので便利なんですね。はい。

まあ、そんなわけで利用規約等はあらかじめ理解していたからすぐに全部の書類を書いて提出した。

すぐにできる依頼を探そうと思ってそのまま受付で話をする。

「すぐできる初心者向けの依頼ってありますか？」

すると受付嬢は困ったように言った。

「あるにはあるのですが、複数人向けのものにして…」

「えっと、じゃあいい方悪いんだけど今このギルド内にいる人で初心者レベルの人いますか？」

「いますよ。でも、ちょっと気難しい人見たいですので無理かも知

れませんか？」

その人の名前と居場所を聞いて向かおうとしたときなんか、ガタイのいいおっちゃんたちが私に向って話しかけてきた。

「おい、嬢ちゃん。人手探してんのか？ だったら、手伝ってやるぜ」

どう見ても、下心のありそうな人たちの誘いを受けるほど私はバカじゃありませんよ！

とまあ、そんなこと言えるはずもないのでやんわりと拒否をする。

「いえ。自分で探すんでいいですよ。」

「ふざけんなよ。こちらら親切に話しかけてんだから何も言わず従えばいいんだよ！」

何！？ この人はアホな人なの？ まあ、こうなっちゃうと対処のしようがない。っていつか片手をつかまれちゃってるしどうしようもない。

さあ、どうしましょうね？ これ位の拘束なら抜けられないこともないけど。いきなり面倒事をおこすのもなあ…。

そう思っていると、一人の青年がおっちゃんの腕をつかみ、

「やめときな。今のお前程度でどうにかなる相手じゃないぜ」

と私に耳打ちしてきた。

「何だ小僧！ 邪魔すんな！」

「邪魔とは失礼だな。俺はこいつの付き添いをするように受付に頼まれたんだぜ？あんたは無理やり俺からその役奪うわけ？ギルドの幹旋の邪魔は結構なあれだよな？」

そう青年が言うと、

「うち！お前らいくぞ！」

と言って、おっちゃんたちが消えていった。

ああ、助かった。

「ありがとう」

「いや、別に……。ところでお前がアリアか？」

「そうだけど」

「俺はヴァン＝アルテミアだ。言ったとおり、受付に頼まれてお前の付き添いを頼まれたのだが……。断っていいか？」

「ええ！いいじゃん一緒にやるっよ」

受付嬢サクス！と思いつつ誘いをかける。

「苦手なんだよなそういうのは……。いつも一人で依頼を受けている上に俺は弱い。だから、役に立ってんはずなんだ」

「むしろそんな人がいいなと思うよ？だって、弱いつていうのは一緒に強くなれるし、苦手を克服できるかもしれないよ？」

「いや、しかしだね……」

そんな感じで押し問答を続けて10分後……。

「ああもう！分かったわかった！俺の負けだ。一緒に依頼を受けてやるし、しばらく一緒に冒険もしてやる！」

幸先いいね！私は、こんなすぐに仲間を手に入れられるなんて。

「うん、よろしくね。ヴァン」

「ああ、分かったよ。よろしく頼む」

このヴァンという青年は20歳でおとし旅に出てここまで来たそうだ。容姿は結構かっこいいめで黒い服が好きらしく装備は黒が多かった。

ちなみにギルドランクDらしいです。私は、入ったばかりでEランク。

でも、一つ気になったんだよね。ヴァンはなんか筋肉の付き方が普通と違った。まあ、眼力鍛えてるからわかったけど、なんか普通に強そうだった。

まあ、でも不躰に聞くのもあれだと思って、聞くのをやめた。

まあ、一緒に行ってくれる人も見つかったし、受付に行くか。

「依頼お願いね。後、さつきはありがとう」

「どういたしまして。よく了解とれましたね」

「まあね」

「いいから、早くしてくれないか？」

ヴァンにせかされた。

「わかったわよ」

「では、ゴブリンとそのリーダー、ゴブリンチャップの討伐依頼です。場所はここから2バルアほど先の村です。」

近くの畑を集団で荒らしているそうなのでその討伐です。ゴブリン自体は一般の初心者より弱いくらいですがゴブリンチャップの統率によりなかなか手ごわくなっていますので気を付けてください。

それでは、お願いします」

そうして、私たちは街を出て村に向かった。

街道を外れない限り魔物とかは出てこないらしい。

ゆっくりと目的地に向かいつつ、ヴァンと話す。

いろんな話を聞こうと思ったのだがそこまで情報は得られなかった。残念。

まあ、私の中ではこの青年は不思議であるという結論に至ったね。

そんなわけで、村に着く前には話すこともなくなり無言で二人して歩く。

しばらく、すると村が見えてきた。

よし、私の人生で初めての依頼がんばるぞ！

第02話「出会ったのは不思議な青年だった」(後書き)

連続投稿。

まあ、次くらいで一回打ち止めですが・・・

第03話「ヴァンさん。実力隠しすぎじゃありませんか？」（前書き）

戦闘描写が入っていますが微妙です。

次回以降の戦闘描写に期待してください。

第03話「ヴァンさん。実力隠しすぎじゃありませんか？」

さあ、そんなわけで依頼のあった村に着きました。

まあ、こういう依頼主は基本的に村長とかが出すことが多いし村長の家を探そうと思っていいたら村の入り口に自警団らしき人がいて声をかけられた。

「君たちが依頼を受けてくれた人たちか？」

「ああ、そうだ」

「わかった。じゃあ、ついてきてくれ」

そうして、連れてかれたのはやっぱり村長の家だった。ありきたりだねえ。

客間に通され、数分待っていると村長らしき人物が出てきた。

「遠いところご苦労様だ。私がこの村の村長レヴァルスだ」

「ヴァン＝アルテミアだ。こっちはアリア＝スカーレット＝レヴァンティア」

「よろしくです」

「うむ。それでは、依頼の話をしようか」

依頼の内容はゴブリンチャップとゴブリン集団の討伐だ」

うん。ギルドで聞いたとおりだね。じゃあ、いつくらいからなのかを聞いてみようかな。

「いつくらいから村を荒らされるようになったんですか？」

「村じゃなくて外の畑だ」

「そうだった。ですね、いつからなんですか？」

「ここ一か月くらいからだな。本来ならもっと早く来てくれるものだと思っていたんだが……」

まあ、簡単な依頼だしランクが低い人じゃないとそうそう受けないかもな。

「とりあえず、来てくれて感謝する」

「いえいえ。で、ゴブリンたちはどのくらいの時間帯に現れるんですか？」

「夕方から夜だな。ゴブリンは普通昼に行動することが多いからおかしな話なんだがな」

ふうん。

「わかりました。今日は来ますかね？」

「ほぼ毎日来てるから来ると思うよ。いつ、食料が無くなるかひやひやしてるよ」

「はい。じゃあ、今回はゴブリンたちを放置して帰っていく道を尾行、巢を明日あたりに破壊するってことでどうでしょう?」

「被害はない方がいいだろ。ただでさえかなり荒らされてるんだ」

「そうは思っけどね、追いついた上に追いかけてまともに巢に戻ると思っ?だから、これが最善だと思うんだけど」

そうするとヴァンはまさかのことを言い出した。

「なら俺が追いつく。お前は奴らを追ってくれ」

「はい?」

どゆこと?

「二人いるんだ。仕事を分けてもいいだろ。どうせ討伐を明日に回すなら二人して追いかける必要もない。なら、一人がゴブリンを追いついて、一人が追いついたゴブリンの尾行だ」

つまり何?私に奴らを追いつてこと?

「ああ」

無理無理!私にはスニーキングのスキルないって!

「覚えるチャンスだろ。あいにくとゴブリンたちは頭が悪い。下手な尾行でも気づかんぞ」

やる前から下手扱いしなくても…。

「自分で言ったんだろ。スニーキングのスキルないって。じゃあ、いいな？」

「わかりました！もう！」

方針は決まったけど、夕方までまだ時間がたっぷりとある。

ちなみにこの世界の時間は元いた世界と結構違う。

一日は28時間で一か月は35日。一年は15か月ある。いやあ、人って環境が違ってもそういうものに対応した進化をするんだね。

今は、ちょうど昼時だし、村長に言って泊まる宿を探すことにした。

ついでにご飯も食べようっと。

宿を取って、フロアで食事をもらう。

部屋だけでもちろん別々。ほんとは安く済ませたかったから一部屋にしようとしたんだけど、ヴァンが嫌がって結局二部屋取った。

「ところで、お前は何で冒険者になったんだ？」

食べているところでヴァンが質問してきた。

「もぐもぐ、ゴックン。ん〜。人生探しかなあ。学者でもよかったんだけど、どうせなら世界を見てみたかったってことで冒険者になったかな。後は自分用の武器の作成もね」

「そうか。ん？武器？」

「うん。自分で作るうと思っててね」

「ふうん。そうなのか」

「ヴァンは？」

「ん？俺か？どうでもいいだろ、そんなこと」

「私には言わせておいて自分は言わないの？卑怯じゃ〜ん」

拗ねたように声を出してみる。でもヴァンは冷静だった。

「そうかもな。でも、まあ。機会があったら話してやる。正直言いたくないんだよ」

その顔は結構真剣だった。まあ、無理聞いても仕方ないし本人もいずれ語ってくれるそうだし、まあいっか。

「まあ、軍に入りたくなかったのが一番の理由だな。何で入りたくなかったのかまでは言わんが」

なんと、言ってくれました。

「いいの言っちゃって？」

「話の核心は言ってないから単にいまこつして冒険者をやってる理由だけだ」

「わかったよ」

そこで、食事も会話も終了した。

* * * * *

部屋に戻って一息つく。ギルドであってからなんだか調子を狂わせられまくってるな。

「集中しろ。集中しろ、俺」

落ち着いてきた。とりあえず、整理しようか。

ギルドで受け付けに頼まれて探して見つけた瞬間、何か気になった。とりあえず助けてから断ろうと思っ話したら、どうしてと言われた。

そのまま、なぜか断れなくなった。なんだろうな。

だけど、悪い気はしない。久しぶりだがこんなのもいいかもなと

も思う。

まったく。

とりあえず今は、ゴブリン討伐を考えようか。

そのあとで、あいつのことを考えよう。

なんとなくだが。あいつ、アリアと一緒に冒険がしたいと思っている。

全く、なんなんだいったい。

* * * * *

翌日。昨日の夕方、計画通りにヴァンはゴブリンを追い払った。だから、私も言われていた通りにゴブリンをスニーキングしてみた。

そしたらなんとこのゴブリンたちめっちゃ大きな巣を作っていた。

巢にいたゴブリンも含めると、ざっと100匹は超えてるかもしれない。

帰ってからヴァンと二人で作戦を練った。正直なところちよつと大きめの魔法を放てば30くらいなら一気に片付く。でも、そして、森の中だったし最悪火事になるかもしれない。だから、村長さんと話をして、自警団の人に巢のまわりに張ってもらうことになった。私たちが突っ込んで削れる分だけ削って逃げ出そうとしたやつを自警団の人が各個撃破していくこととなった。

そんなわけで、今、私とヴァンはゴブリンの巢の近くにいます。すでに巢の周りには自警団の人たちがいて、私たちが巢に特攻をかけるのを待っている。

「いけるか、アリア？」

「もちろん！いつでもいいよ！」

「元気だな。じゃあ、いくぞ！」

そう言っただけでゴブリン達の巢に突っ込む。

ゴブリン達は私たち闖入者の姿を見つめるや否や突っ込んできた。それでも何匹かで他のはまるで何かに報告でもいくかのようには消えていった。

まあ、奴らは後でもいい。とりあえずこっちに突っ込んでくるゴブリン達を切りつける。

しばらく、戦っていると近くで戦っていたヴァンが声をかけてき

た。

「落ち着いてるな。初めて、魔物とはいえ生き物殺したんだろ？」

ええ、まあ。

「そんなことはないよ。内心びくびくしてるよ。でも、困ってる人たちのためになるならできる」

「そうか、がんばれ」

そうこうしてるうちに向かってきたゴブリン達は片付けた。武装もほとんどしていなかったので簡単に勝てた。

でも、休んでいる暇もなく奴らは現れた。

「ねえ、ヴァン。あれ何の冗談？」

「さあな、でも異常事態ってことはいくらなんでもわかる」

現れたのは完全な隊列をなしているゴブリン達だった。まるで、どごその軍のように整列していた。

動かないので様子見を続けると、大きな影が現れた。

「レッドオーガ赤鬼だと…！」

レッドオーガ。ゴブリンの進化種であるオーガの亜種。火を自在に操り危険。知能は人間ほどでもないけど、力もすごい。

「あいつがリーダーね。まとめれるほどの知能をもったオーガって珍しいかもね」

「のんきに言ってるな。あいつどうする？」

「殺すよ。もともとそのつもりだし。ほんとはできるでしょ、ヴァン」

そういつとヴァンは舌打ちした。

「うち！わかったよ！やればいいんだろ！」

「素直でよろしい」

レッドオーガはしびれを切らしたのか大きく叫んだ。

すると、隊列を組んだゴブリン達が突っ込んできた。

「お前も本気出せよ！」

「私のできるかぎりはね！」

「ここまでたくさんいたらとてもじゃないがまともに戦ってられない。だから私は魔法を使った。」

「貫く雷光よ、今、我の手に力をなせ！ヴォルテクスランス！」

出てきたのは槍の形をした雷。それを向かってくるゴブリン達に向かって投げつける。

放たれた雷の槍はゴブリン達を貫き隊列の真ん中ほどに達する。そこで、追加の呪文を言い放つ。

「弾ける！エクスプロージョン！」

瞬間、雷が落ちたかのようにまわりに光が満ちた。思わず目をつむる。

目を開くと自分に向かってきていたゴブリン達は一掃されていた。

「ふう。まずは20！」

数えた感じ約20体。昨日見た感じの100匹ほどならあと80異常は残っているはず。あたりを見回してヴァンの姿を見つける。だが、そこにはあり得ない光景が写っていた。

すでに50以上ものゴブリン達の死体が転がっていたのである。

私が槍を投げて弾けさせるまで約40秒。いくらなんでも早すぎませんヴァンさん。

見ているとヴァンはさらに死体を量産し続ける。

「おい！見てるなら手伝え！」

ヴァンがこっちが動いていないのを見て声をかけてくる。

言われてから私はすぐに動く。向かってきていたゴブリン達10匹ほどを剣で倒す。いくら統率されていてもゴブリンはゴブリン。弱かった。

倒し終わって目をやると、すでにヴァンはレッドオーガと戦闘していた。しかも、レッドオーガを圧倒している。実力を隠してるとは思っていたけどこれは隠しすぎじゃない？ギルドランクB〜Aはあるんじゃない？

戦闘を見ていると、ヴァンの動きはすごくしなやかだった。

レッドオーガが振り下ろす棍棒をぎりぎりの距離で避け腕を切る。口から吐き出す炎を避け足を切る。倒れた所に飛び乗り剣を目に突き刺す。

そんな、行動を流れるようにやっている。昔ならいざ知らず、今の私だってあんな動きをするのは無理だ。

そう思っているうちに戦闘は終わった。レッドオーガは倒され、ヴァンは怪我ひとつなく立っている。

とりあえず、一言。

ヴァンさん。実力隠しすぎじゃありませんか？

第03話「ヴァンさん。実力隠しすぎじゃありませんか?」(後書き)

これにて連続投稿を終了します。

誤字など誤りありましたらご連絡ください。

感想も待っております。

第04話「ギルドへの報告どうします?」

戦闘も終わって魔物を倒したことを証明するための部位をはぎ取って行く。村人たちも手伝ってくれているのでそんなに時間がかからずに終わると思う。まあ、そんなわけで村に戻ったらきつと話す時間が長く取れないかなって思ってヴァンに話しかけた。

「ねえヴァン。あなたの實力、軽くBとAは行ってるよね? どうして、實力隠してるの?」

答えを聞けるとは思ってない。でも聞いておかないとたぶん誤魔化しもできなくなるはずだから聞いた。

「答えたくはない。だが、お前はどうしても聞かなきゃと思ってるのか?」

そう聞き返された。もちろんこう答えた。

「うん。だってこれからも一緒に冒険したいと思ってるもの。それに、解答次第ではギルドへの報告を誤魔化さなきゃいけないし、その場合は村人にも根回ししないといけないしね」

「わかったよ。だが、全部は答えたくないな。

まあ、簡単に言うと、前にも話した通り軍に入りたくなかったから冒険者をやってるんだ。だけど、もともと軍に入れるためにずっと鍛えられてきていたわけだ。だから、あの程度の敵なら何とかなら」

「ふうん。で、どうしたいの? 誤魔化すなら根回しするけど」

「いや、いいさ。目立ちたくないからランクを上げてないだけだ。お前と一緒に旅をすることになるなら上げていく必要も出てくるだろ？お前的にはランクを上げていきたいんだろ？」

「まあね。私が目指している場所にはランク制限の場所とかもあるしがんばんなきゃね」

「そうか」

それで会話は終わった。でも、ギルドの報告めんどくさいんだろ
うな。

レッドオーガ
赤鬼は討伐ランクC〜Bのいわゆる中堅クラスの魔物だ。だからこそ、冒険を始めたばかりのEランクと二年でDランクまでしか上げていない冒険者がレッドオーガを倒したとなればきつと面倒くさいことになるんだろうな。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

自分でも意外なことを言ったものだ。最初はあれだけ嫌がっておいていまさらなんでこう言ってるのか自分でも不思議だが、このアリアという少女と一緒にいればきつと俺は俺でいられると思った。俺は、『あの人』の息子として見られなくて済む。そういう思いもある。

アリアはどんな奴なのかはわからない。でも、見せてくれた笑顔は全部が良かった。

まあ、俺の持つてる『アレ』を使うこともほとんどないだろうからな。あいつと一緒に旅をするのも悪くない。

とりあえず今、俺達はもう一日村に留まってからギルドに向かうことになった。なので今日のところは村長の家に泊まることになっている。

で、夜には祝勝会が行われ、それも終わり俺達はあてがわれた部屋へと戻っていた。

今日の戦闘のことを思い出す。

数がいたから本気で戦った。ある程度洗練されてはいたが所詮はゴブリンだったから問題ない。問題はレッドオーガだ。あれは本来こんなところに生息する奴らじゃないし、何よりあいつらはゴブリンの進化種だから基本的には頭が悪い。なのに奴はゴブリン達を鍛えまとめていた。つまり、レッドオーガにかなりの知能があった。おかしいどころではないが、戦闘自体は通常のレッドオーガと何ら変わりなかった。つまり、集団戦闘についての知識のみを詰め込ま

れていた。

「何者かが魔物に知能を与えてる？」

だが、何の目的で？

一応過去にも魔物に知識を与えていたものがいたのも確かにある。だが、その人物はすでに捕まって処刑されたはずだ。魔物に知識を与える技術も帝国が既に回収して誰の目にも触れられないようにしてあるはずだ。

何者かが暗躍しているのかもしれない…。

「まあ、俺にできることなんてたかが知れてるしできることはほとんどないんだろうがな」

考えてわかるのはここまでだ。所詮、俺たちにできることなんてない。あくまで考えることしかできないしこの考えが正しいとも言えない。

「これをギルドに報告するのはやめておこう。わからない情報を流して混乱させても仕方ないしな」

そう考え、思考を終える。

この考えが当たるなんてことがないことを祈りたいが絶対はあり得ない。もし、この考えが当たっていたとしても俺達が巻き込まれるようなことじゃないだろ。

そう思っていると、ドアをノックする音が聞こえた。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

ヴァンが今日の戦闘への考察をし始めたのと同じころアリアも同じように戦闘を思い返していた。

ううん。やっぱ、何かおかしいんだよね。いくらゴブリンに知識があついてもあそこまで隊列を組んでなおかつ連携をとれるほどの知識を持つことなんてほぼありえないはずなんだよね。

やっぱりあのレッドオーガ？でも、レッドオーガも一応はゴブリンの進化種だし、知能自体はゴブリンより上とはいえ基本的に本能のまま戦うタイプだから、あそこまでの連携を整えられるはずはないんだよね…。

やっぱ、何かあるのかな？でも、ハッキリ言って何なのかはわからないし私にできることがあるとは思えないしね。

ヴァンのほうも何か考えてるかもしれないし、これが異常ならギルドへ報告するべきかも相談したいしね。

そんなわけでヴァンの部屋の前まで来ました。なんかね、入り辛いよね。私だってちゃんとした青春真っ盛りの女の子だよ。この世界の換算だと分らないけど、恥ずかしいんだよね。

まあ、恥ずかしがっていても仕方ないからノックしよ。

コンコン

「誰だ」

「アリアだよ」

「わかった。入っていいぞ」

入りまゝす。

入った部屋は簡素な部屋だった。ってまあ当たり前だよ。借りてる部屋なんだし。

「で、何の用だ？」

「んとね、倒した奴らだけどねちよっとおかしくなかった？」

「おかしいつてのは？」

「なんか統率取れすぎな気がしてね。いくらなんでもレッドオーガ

でもそこまでの知能はないはずなんだよね」

「そうだな。俺もそう思っていたとこだ。あれが異常事態なのはわかってはいるが原因が分らない」

「そう。心当たりはあるんだよね？その言い方だと」

私はヴァンが言った時の微妙なニュアンスからなんとなくそう思
い聞いた。

「まあ、あるにはあるんだが……。最悪のケースだとこの大陸で大規
模な戦争が起こりかねないくらいやばいかもしれん……」

絶句したね。まさかそんな事態まで起きかねないなんて。

その後、どうということなのかを聞いた。

まとめると、

何十年か前にグラヴィス帝国で魔物を操って帝国を乗っ取ろうと
した魔導師がいて、その時に使用されていたのが魔物に知識を与え
た上に洗脳して使役するというものだったそう。

その魔導師はグラヴィス帝国とフィアナ王国の連合軍によって行
われた魔物の全滅によって無防備になったところを捕らえられ、死
刑になったみたい。でも、その魔導師の記した魔物に知識を与える
外法は残った。今は、帝国が禁呪書庫で厳重に管理しているらしい。

最悪のケースとはつまるところ、帝国がその外法を使い魔物を使
役。そして、他の国を侵略しようとした場合のことだった。

「それマジやばいじゃん！」

「そう言ってるだろ、最初から…。だから、この件はギルドには報告しない。一応レッドオーガがいたことを報告するだけだ。」

まあ、村人には最初から魔物の異常な行動については言っていないから問題ないしな」

そう言って締めくくった。

最悪のケースにならなければいいけど…。

そのあと、部屋に戻って寝た。意外と良い眠りでした。

次の日、昼過ぎに村を後にした。

村長に依頼完了の紙をもらいギルドに行く。2バルアの距離は意外と長いからいろいろ話しながら歩く。

ちなみに、普段歩く街道に魔物が出ることはほとんどない。整備された道であり魔物も好き好んで食料の多い森などから出てきて襲うことも多くない。村などへの襲撃はそういうのとは違い食料の豊富な村を襲う方が魔物にとっても楽であるのは確かだ。だから、昨日みたいな討伐の依頼はたくさんある。

まあ、雑務系の依頼が一番多いことにはかわりはないけど。

そうこうしてるうちに街に着く。ちなみに私が住んでいた街。商業都市ラインルート。商業で栄える街である。

ギルドに行き、報告をする。と言っても、報告するのは事前に話し合っていたことだけで、知能を持っているような行動をとっていたことは報告しない。今後もあるようならば報告の必要もあるとは思う。だけど、混乱を招いても仕方がないからということとで報告はしないことにした。

この日、私たちは、この街で宿をとった。

明日にはここを出て、鉾山都市グレイバンに行こうかな…。

第04話「ギルドへの報告どうします?」(後書き)

これにて一章です。短くてすいません。

次章はそれなりに長くなるつもりです。

次の投稿はちょっと時間を置きますが、長くても一週間から二週間で投稿できたらと思います。

感想等をお待ちしております。

第00話「私はまた会いたいから……」(前書き)

新章です。

第00話「私はまた会いたいから……」

茉莉が死んで早一年近くたった。あの冬の日の悲劇はいまだに忘れない。あの日から私は自分の不甲斐無さを忘れない。

私の家の事情に巻き込んでしまった茉莉。私を守って死んでしまった。

狙われることはいままでも多くあった。何であの時反応出来なかったのかはわからない。

だから、あの時からずっと鍛えてきた。もう二度とあんなことにならないために……。私にできるはずのことをやるために……。

それにまだ会えるはずだから……。

私はまた会いたい……。だから……

* * * * *

「じめんね。こんな時期に呼び出して」

私は放課後、仲間たちを屋上に呼んだ。受験が迫るこの時期に私は話すことがあると呼びつけた。

迷惑極まりないことは承知してる。でも、伝えておかなくちゃきつと困る。

「杉浦氏よ。別に我々は気にしておらんよ」

「そつだぜ？何か大切な話があるんだろ？」

「うん。今から話すことはかなり大変なことなの。事によっては受験を諦めてもらうことになるかもだから。まあ、皆の意思次第だけどね」

「そつなの？まあ、話してみてくれると助かるかな」

私は涼歌の言葉を受けて私は話し出す。

「もし、また茉莉に会えるなら会いたいかしら？」

私が言った言葉に皆が固まる。まあ、無理もないか。死んだ人間に会えるわけがない。普通ならそつだよな。

「どついうことだ、杉浦氏？」

「説明が長くなっちゃうから、この話は私の家でやりたいんだけどいいかな？」

そうして、柿崎巖太・ギルバート・レクティファール・水鳥涼歌の三人は杉浦未羅の実家へと招かれた。

「「「なんじゃこりゃー！ー！ー！」」」

三人の声が重なって聞こえた。まあ、連れてきたのは豪邸だったし。これが家ですなんて言われたらそりゃ驚くよね。

来的时候に乗ってもらったのは黒塗りのリムジン。皆にはお金持と言ってあつたけど、ここまで裕福だとは思ってなかったのかな？

皆を私の部屋に連れていく。

「入って」

私が先に入り、皆を呼び入れる。

皆が部屋に入ったところで扉の鍵を閉める。

「何故、鍵を閉めるのだ？」

「ここで働いてる使用人にも話を聞かれたら困るからかな。私の家が何をやってるのは知らないからね」

皆をソファに座るように言う。全員が座ったところで再び聞く。

「じゃあ、最初に聞くね？もし、また茉莉に会えるなら会いたいかしらっ。」

「それは、気持ちとしてかな、杉浦氏？」

「そうだよ。会える会えないに関係なく、あなたが茉莉に会いたいと思ってるかを聞いてるの」

「ふむ、そうか。それならば、私はもちろん会いたいと思ってるぞ。柏葉氏は同士であり仲間であるからな」

「俺もそう思ってるよ」

「僕もそう思ってる。会えるのなら会いたいもん」

私はその言葉を聞いて私は安心した。思っていないと言われるのが正直怖かったのは確かだ。

でも、大丈夫だ。だから、私はみんなに言った。

「茉莉はね、異世界で生きてるよ。違う人間として生まれてるけどね」

その言葉にみんなが絶句した。でも、これでようやくスタートラインに立てた。

待っててね茉莉絶対会いに行くから。

第01話「私の夢は…」

以前にもお話ししただろうか。

私は、親友を守って死んだ。そしてこんな世界に転生した。

そのことに不満なんて一切ない。あるのは、親友への思いだけ。助けられたのかはわからないけど助けられたのなら良かったな。

まあ、そうならいい程度だけだね。

会えるのならば会いたい。そう思う。でも、私にできることなんかほとんどない。この世界の魔法に異世界への扉を開けることのできる魔法はない。完全には言えないけど有名な学術書は読み漁った。でも、そんな魔法はなかった。だから、ないんだとそう思う。それに、もしあったとしても未羅達はもう30歳を超えてるはずだ。だから、あってもわからないんだろうと思うし。

だから私はこの世界で生きていく覚悟を決めている。だからこそ、私には夢がある。この世界で生きていくために夢を持った。

そう、私の夢は…。

* * * * *

「グレイバンに行こうと思うんだけどどうかな？」

私は、朝食をとっている最中にヴァンに提案していた。

「いいが、どうして鉾山都市なんだ？世界を見て回りたいたいんだろ？」

「うん、そうなんだけどね…。もう一つの目的を先にやろうかなって思ってたね」

「いいぞ。俺は目的もって旅してるわけでもないしな。しばらくは一緒に旅もするぞ」

よかった。断れなくて…。

「で、何が目的なんだ？」

「言わなきゃだめ？」

正直、人に言うのはちょっと恥ずかしいんだよね。

「別にいいんだが聞かせてほしいかな」

「／／／」

まさか、聞かせてほしいなんて言われるとは思ってなかった。思わず、顔が赤くなっちゃったよ。

落ち着け、落ち着け私。

ふう。落ち着いてきた。よし。

「え、ええっとね。私の夢の一つが、自分の武器を自分で作る事なの。でね、その為の材料を集めたいんだけど、そのために一回行っておきたいかなって。行ったからって全部そろっ気はしないんだけどね。たはは」

うえ〜ん。うまくしゃべれないよ。

なんでだろ。心なしかヴァンの顔も赤くなっているように見える。まあ、私はものすごく赤くなってるし……／＼／

はずい、マジではずいよ。

「ま、まあ、目的があるならそうしようか。鉾山都市行きの依頼がないか見てくるわ」

そう言ってヴァンは席をたって行っちゃった。

ううん。まだ、顔が赤いよ。なんでだろ。ヴァンといるとちょっとドキドキするんだよね。

* * * * *

何なんだよ。あいつは。めちゃくちゃ可愛いじゃねえか。

って俺は何を考えてんだ！落ち着け…。

ふう。なんだろうな、全く。

アリアといると調子が狂わせられるぜ、まったく。

とりあえずギルドに行くか。ちなみに今の俺のランクはCでアリアはDだ。レッドオーガを二人で倒したんだから当然か。

ギルドにつき依頼書の張り付けてある掲示板を見る。

その中に護衛の依頼があり、ちょうど鉱山都市に向かう商人が出しているみたいだ。

よし、これでいいか。

俺はその依頼書を取り、受付に持って行った。

* * * * *

暫くたつ頃には私も平常心を取り戻した。なんであんなに緊張したんだろ。謎ですな。

宿屋でヴァンを待つ。グレイバン行き護衛があるといいな。

とりあえず、グレイバンについてまとめようかな。

鉾山都市グレイバン

文字どおりに多くの鉾石が掘り起こされる鉾山がたくさんある都市で鍛冶などもかなり盛んだね。

住んでいるのは主にドワーフが多くてその次に人間かな。

この都市で作られる武器は量産された鑄造の物から鍛冶師が丹精込めて打ち上げた一品ものまで幅広くある。

こんな感じかな。後は武器についてかな。この世界に来て私が一番びっくりしたんだもの。

この世界　ヴァルテスト　には通常の武器とは違う武器が存在する。

ただの武器はそれこそ使い古されていくようなものだけど、この世界の武器にはそれより上の武器が存在する。

進化する武器、通称リアファーレ。

文字通りに進化していく武器であり使用者に合わせた武器に進化していく武器である。

ただし、武器の形状と持つ属性は変えられないが、一度使えば一生使える武器なのである。

まあ、マスター登録が必要で、一度でも進化をした武器はほかの人が二度と使えなくなるから問題なんだけどね。

ちなみに普段から武器の大きさのままのものもあれば、小さなアクセサリー程度の大きさにできるものもある。

値段はどちらも半端じゃないほど高くて貴族とか大商人の子供とかくらいしかもってない。

作るのにも資格が必要で国家試験をクリアしなければならぬ。筆記と実技があつて、この試験に通るのは年間で一人か二人だそうだ。

この武器を作るのに使われているのは古代文明の遺産である技術だから、作り方は分かつてもどうという理論でできているのかまでは分かつてないそう。

なもんで、筆記試験は作る工程を聞くだけ、実技はレプリカモデルの作成。まあ、その手順も異常なまでに難しいんだけどね。

まあ、武器はこんな感じだね。鍛冶師の免許は二種類あつて普通の武器とリアファーレね。これ持つてないと商売できないんだよ？

ちなみに私はどっちも持つてるよ。最年少で取得したらしいけど、

騒がないでほしかったから頼んで隠ぺいしてもらった。いやあ、騒がれるのは得意じゃないんですよ。

もちろん作るうと思ってるのはリアファーレだよ？

そんなこんなで、しばらくたつとヴァンが返ってきた。

「これでいいか？つつかこれを頼んできた。もちろん俺とおまえの名義でな」

渡された依頼書を読む。

ええ何々。

依頼：鉦山都市グレイバンまでの護衛

人数：5名

内容：鉦山都市グレイバンまでの護衛を頼みたい。道中での衣食住はこちらで持つ。

報酬：銀貨4枚

依頼主：ゴルテアⅡルブルスⅡレヴァンティア

ん？ゴルテアⅡルブルスⅡレヴァンティア？

「って！これ父さんの依頼じゃん！」

「は？おまえ、ゴルテアさんの娘か！？」

「そうだけど、なんでヴァンが驚いてんの？」

「ゴルテア＝ルブルス＝レヴァンティアさんはフィアナ王国の中でも王族に認められるほどの大商人だぞ！なんで、その娘が冒険者なんてやってるんだ！」

ええ！？そうなの！？全く知らなかった…。だってうちでは多少は裕福に暮らしてたけど結構質素だったもん。

「まあ、そうだな…。そういうところも認められて、あの人は国認定の商人をやってるんだろ…。部下もいるはずなのに自分で行くものすごいな…」

「『売る品物は自分の目で確かめて売る。買ってもらう人に粗悪品を渡さないようにな。雇う奴も俺が決める。楽しい買い物をしてもらうためにな』が信条だよ。絶対に自分が納得しないものは売らないんだって」

「そうか。で、これでいいか？」

親と行くのは恥ずかしいけど、楽に行けるしいいか。

「うん、いいよ」

こうして私たちは鉾山都市に向けての準備を始めることになった。出発は二日後でその時にほかの冒険者とも顔合わせをするらしい。

出発の前に家に顔を出しとこつかな？

第01話「私の夢は…」 (後書き)

まともに戦闘してません。

その上にブレイドガンナーが何なのかも全然明かされません。

この章が終わるまでにはブレイドガンナーが何なのかを明かせる
といいな…。

第02話「出発前のひとじま」

冒険者になつてまだ一週間もたたずに家に顔を出すことになるなんて思つてなかつたな。

まあ、いいか。そんなわけで、私は今、ヴァンと一緒に私の家の前にいます。

「いやあ、さすがにこんな早く顔を出すことになるなんてね」

「まあ、仕方ないだろ？お前の希望を通すならこれが手っ取り早いんだからな」

まあ、いいですけどね。

玄関をノックしてしばらく待つ。すぐに「はい」という間延びした声が聞こえた。その後、何かが倒れる音とガツシャーンという何かが割れる音が聞こえたんだけど気のせいだよな？

それから、ちよつとしてから、扉が開いた。

「ああ、お姉ちゃんだ。おかえり。早かつたね」

妹が対応をしてくれた。さっき転んだのは母であるらしい。ちよつとしたドジがまだになおらないんだから…。

家上がり、妹に母を見てあげてと頼み、そのまま、父の部屋へと向かう。

「父さん。いる？」

と聞いたら、

「いるぞ？つうか、その声はアリアか。まあいい。入れ」

と言われたので入る。

「早い帰宅だな」

「別にそういうつもりじゃないよ。はいこれ。依頼書ね。私たちがグレイバンまで同行するから」

「そうか。で、そちらさんはだれだ？」

「ヴァン＝アルテミアです。今は、アリアとパーティーを組ませていただいています」

へえ、そんな敬語とかもできるんだ。

「アルテミアねー。まあ、いいさ。とりあえず出発は明日だ。明日集合場所に来てくれ」

「はい」

その日はそのあと、ヴァンと一緒に買い物をして、宿に帰った。

* * * * *

「ふむ。アルテミアか…」

そういえば、そんな偽名を奴も使っていたな。

「親子か？もしそうなら血は争えんな…」

あの子が何を求めてヴァンという少年と一緒にいるのかはわからないが、あの少年が娘に悪影響を及ぼすことはないだろう。

「あなた〜。ど〜」

呼ばれているな。行くとするか。

「どつした？」

「アリアちゃんは行っちゃったのかしら？」

「まあな、明日から俺の護衛でグレイバンまで行くがな」

「そうなの。じゃあ、私も」

「お前は自分の仕事をしろよ……。この前泣き付かれたぞ……。『メルティア様が』ってな。いくら皆がやってくれるからってさぼるな。ただでさえ無理言っつて普段はここで仕事してるんだからな。それにそろそろ一度行かないといけないんじゃないのか？」

「うん……。そうですね……。仕方ありません……。」

全く。それにしても明日からは楽しみだな。あいつの実力を見る
ことができるからな。

* * * * *

翌日、集合場所に行くと他の冒険者の方が既にいました。いたのは人数は4人。

「護衛依頼を受けた方々ですか？」

と声をかけた。

「そうだ。そちらもそうか？」

「ああ、そうだ。自己紹介は必要か？」

「そうだな。数日とはいえ一緒に仕事をするんだ。お互いを知っていた方がいいだろう」

「そんなわけで自己紹介。」

「俺は、バルバドス＝マルフィだ」

先ほど一緒に会話をしていたパーティのリーダーらしき人物だ。

「私はリバティ＝ウルス」

「グレイ＝ラング」

「私は、エルミィ＝アンリエットだよ」

あれ？護衛人数が多いよね？

「ああ、そのことか。多少多くてもいいらしくてな。6人でもいい
そうだ」

「そうか。俺は、ヴァン＝アルテミアだ」

「アリア＝スカーレット＝レヴァンティアです」

「レヴァンティア？依頼人なのか」

「娘ですけど、一応護衛として来てますよ?」

「そうか。こちらは数年一緒に組んでいるパーティーで、全員Bランクだ。グレイバンの近くの都市に用があってなちょうどいいと思って参加した」

「ランクはDとこだ。グレイバンに用があっっていく」

「そうか。しばらくよろしく頼むぞ」

話し終わるのを待っていたかのようなタイミングで父が馬車数台でやってきた。

「おつおつ。揃ってるみたいだな」

「はい」

「じゃあ、出発するぞ」

そつ父さんが言ったので出発する。

何も起こらないといいな?。

第03話「こんなお約束なことってあり得るんだ〜」

護衛として父さんのグレイバン行きの馬車について早五日、特に問題もなくここまで来てる。

途中に小さな村とかもありその村で品物を売ったりもしていたのでちょっとばかり時間がかかっているのかな？

そんなことはいいとして、今通っているのは山道で結構きついです。

景観も何もあつたもんじゃない荒れた山道は通ってるだけで心がすさむような光景だね。やる気が失せるってもんかな？まあ、やるけど。

何も無い山道自体はこの世界には何処にでもあるらしい。森とかが広がる山もあるにはあるらしいけど、ほとんどはこんな感じの荒れ放題の山道だ。

しかも、しゃべることもない上にこの世界には娯楽系の遊びが少ない。ただ黙って歩くのは辛いものがあるのに、誰もしゃべらずただ黙って歩く。

ううん。持ち前の想像力を駆使しようにもこの世界自体がファンタジーで私の想像を掻き立ててくれているわけだ…。

あ、そういえばあの理論もあと少しでできるんだった。論文をまとめとかないと。

と思っただけどそういうわけにもいかないみたいだね。

「皆、何かが近づいてきてるよ」

「む、そうなのか？」

「みたいだな。何が来てるのかはわかんないけど、足音がするな」

マルフィさんが答えて、ヴァンが説明を加えてくれた。

「ふむ。警戒はするべきだな」

マルフィさんの言葉に私たちは頷いた。

その後、しばらくたってもその足音は消えずについてきてるようだった。

「明らかにおかしいですね。動物ならついてくるなんてことはしないはずですし、魔物なら聞こえた時点で襲いかかってきますよね？」

「ああ、となると盗賊なのかもな。警戒の度合いを引き上げるとしよつか」

警戒せずに何か起こると困るけど、警戒して取り越し苦労でも困ることはない。だから、警戒する。もちろん、何もないに越したことはないんだけどね。

さらに時間が過ぎてもその足音が消えることはなかった。

山道を抜けようやく平地に出た。

足音はまだついてきている。一応、開けているのだから探せば見つかるはずなのに見つからない。明らかにかなりのスニーカーのスキルを保有しているとみてよさそうだ。足音自体は私とヴァンしか確認できていないから、何とも言えないんだけどね。

すると、父さんが馬車から顔を見せ言ってきた。

「そろそろ、休憩を取ろう」

そういわれ休憩を取ることにした。

休憩を始めてすぐに父さんの部下の人たちが食事の準備を始める。私達は警戒を強め周りを見回る。

ちなみに足音は休憩を始めてすぐに聞こえなくなった。やっぱり怪しいな…。

「ねえ、ヴァン。やっぱりおかしくない?」

「ああ、そうだな」

「言いたかないけど、お約束も的なことってあるのかな?」

「何が言いたいだお前は…」

「ううん。気にしないで。それより、ご飯の手伝いしよ？」

そのあと、私達はマルフィさん達に見回りを任せてご飯を手伝った。

そして、ご飯も食べ終わった頃にそのときはやってきた。

* * * * *

「おい、おめえら準備はいいか？」

「おうよ、お頭！」

俺達は久しぶりの獲物に心を躍らせていた。最近このグレイバンへ向かう道を通るのは冒険者等の屈強な戦士ばかりで全くと言っていいほど何もできずにいたわけだ。

そこにきて大型のキャラバンがやってきたわけだ。手下共による

と馬車数台に護衛はたったの6人。舐め過ぎだぜ。

自分で言うのもなんだが、俺達は有名な盗賊団だ。

失敗したことは数えるほどしかないし、今までも大きなキャラバンをいくつも潰してきた。

効率を考えるなら大きなキャラバンをつぶすのが一番だが、大きなキャラバンほど警戒も強い。

だから、この数年は潰せそうなキャラバン以外は慎重に慎重を重ね襲ってきた。それ以外は小さなキャラバンばかり狙った。

でも、やっぱり盗賊家業をやってる以上は大きなキャラバンを潰すのが楽しいのだ。

だからこそ、今回やってきたキャラバンは飛んで火に入る夏の虫ともいうべき最高の獲物なわけだ。

これを逃す手はないと相手が油断した隙を狙っていると奴らは食事を始めた。だから、俺はさっきのような発言をしたわけだ。

「今回の獲物を逃す手はねえ！」

「「おう！」」

「俺達の悪名をさらに知らしめるために！行くぞ、お前ら！」

「「おう！」」

「では、いくぞ！」

「「「「我が『黒狼の牙』の名に恥じぬ略奪を！」「「「

その言葉と共に皆で襲撃をかけた。

さあ、良いものを積んでいてくれよ？

* * * * *

思っていたとおり、相手は盗賊だったみたいだ。

大きな砂埃と共にいかにも盗賊って感じの服装をした人たちが突っ込んできている。

だから、思わず私は呟いちゃった。

「こんなお約束的なことってあり得るんだ〜…」

「何を呑気なことを言ってるんだよ…。あれがここに到達するまで

にどうにかできないな、俺は。お前はどうか、アリア？」

「出来ないことはないけど全滅はきついな。それにあの人たち結構強いよ？」

「君たち、何を言ってるんだ！早く迎撃の準備をしたまえ！」

「はい、じゃあ一発放ちますんで準備お願いします。あ、父さん。馬車の中にいてね」

私は声をかけると詠唱を始めた。

「君は何をするつもりだ」

「さあな。つつか詠唱中の人間に答え求めるのは間違ってるぜ。マルフィさんここにも魔術師いたよな？」

「ああ」

「じゃあ、殲滅魔法系はある？」

「残念ながらないよ」

「緊張感ないな……。じゃあ、アンリエットさんはできる限り大きい威力の魔法を固まってる所にはなって下さい」

「はい」

「おいおい、君たち本当にランクが低いのか？対処早過ぎだぞ？」

「そうですね、いろいろ仕込まれてるんで。じゃあ、お願いします。他の方は魔法から抜けてきた人たちを迎撃してください」

「わかった。君も準備を…」

ヴァンはそう言われて戦闘の準備を始めたようだ。っていうか最後の声ってラングさん？最初に聞いて以来久し振りに聞いたわ。

そんなことを考えつつ詠唱を進める。

盗賊たちはもう顔も判断できるほど近くまで来ている。そろそろ魔法を放たないと…。

「世界は凍り、大地は氷に包まれる…今、全ての世界は白銀となる！コキユートス！」

私が言葉を紡いだ瞬間盗賊達のいた場所が白銀の世界に包まれた。盗賊達は大地とともに凍りつき、ほとんどの盗賊がその場に縫いつけられる。

それでも倒し切れたのは全体の約3割。全部でどれだけいるのよ！この前のゴブリンより多いんじゃない！？

「いいから続けて打て！この人数をまともに相手したら負ける！減らせるだけ減らせ！」

ヴァンにそう言われ続けて詠唱を開始する。隣に来ていたアンリエットさんは今詠唱が終わったようだ。

「水は満ちて、流し逝かん！フラッシュフルード！」

アンリエットさんが紡いだ言葉によって起きたのは鉄砲水のように押し寄せる水の塊。押し寄せる水に飲まれ一割程度の盗賊達が流される。でも、これじゃ流されるだけなので私は追い打ちをかける。

「空は怒りを吐き出し、大地にそれを落さん！サンダーボルト！」

水は電気をよく通すという言葉にちなんで水で流されている奴らに雷を落とす。感電し、次々と倒れる。

「次行きます！アンリエットさんお願いします！」

「わかったよ」

そうやって魔法を放つ準備をする。さっきのコキユートスみたいな大型はもう使えないし考えないと…。

* * * * *

二人が放つ魔法を潜り抜け来た盗賊を切り倒す。

自分の使ってる粗末な剣がいつ壊れるか分らないができる限りはやらないといけない。できれば『アレ』は使いたくない。だから壊れてくれるなよ。

向かってくる盗賊二人を切り倒す。

これだけの戦力差をもろともせず戦ってる自分たちもすごいと思うが、これだけの状況を見て今なお向かってくる盗賊もすごいと思う。正直すごいと感じる。訓練されてはいないといえここまでまとめ上げられているのはあり得ないことだ。これは、本当にやばいかもな。

「アルテミア！大丈夫か！」

「ああ！あんたこそ大丈夫か！」

「まあな！なるべくここで倒せ！馬車の近くにリバティを張らせてはいるがあいつ一人で全部できるわけじゃない！」

「分ってる！」

俺はそう言っで、向かってくる盗賊達を切りつけていく。倒しても倒してもきりが無い。アリア達が放てる魔法は規模の小さいものになっていった。いまのまま行けば危険だ。

わかってはいてもどうしようもないひたすら向かってくる盗賊を倒し続けるだけだ。

* * * * *

何なんだこいつらは…。

既に連れてきた部下の半分は死んだ。

先代から続く、悪名高い『黒狼の牙』がたった六人の冒険者が守るキャラバンを落とせないことはないはずだ。

なのにこれはどういうことだ？ たった六人相手に梃子摺る上に、五百近くいた部下はもう半分は切っている。

あり得ん！ 断じてあり得ん！

だが、目の前で起こっていることは紛れもない真実だ。

仕方ない。やるか…。

いくらなんでも全滅は避けなければならん。ここまでの被害を出しておいて逃げるのは不本意だが背に腹は代えられん。

そうして俺は、護衛をしていた青年へと特攻を仕掛けた。

* * * * *

「野郎ども！撤退だ！」

そんな声が聞こえた。私はすでに詠唱をやめて武器での攻撃に切り替えていた。人数のでせいか抜けてくる人数は意外と多かったのだ。

でも、そんなことよりさっきの声はなに？撤退？盗賊が獲物に手を出して撤退するなんてありえない。

思いのほかこの盗賊達の頭は頭がいいらしい。

見ていると、ほとんどの盗賊はきびすを返し撤退をしている。

撤退していく方向を見ると、大柄の男がヴァンに向かって攻撃を仕掛けようとしているのが見えた。

それが見えた瞬間私はとある魔法を使った。まだ完成というにはちょっと不安が残る魔法だ。

「ソニックムーブ！」

刹那、世界はゆっくりと時を刻み始める。

ソニックムーブ

自らの肉体を加速し素早く動く魔法。なお、この魔法を使っている間は思考も加速される。

私は駆けヴァンの前に躍り出る。振り下ろされる斧を剣で受け止める。

ガキーン！

「何！？」

盗賊の頭らしき人物の声だ。

そりゃ、当たると思って振り下ろした物が狙った相手以外に受け止められれば誰だって驚く。

「ヴァン、大丈夫！？」

「あ、ああ。助かった」

私は剣を上にかいっぱい払いのける。斧を持った盗賊の頭はすぐさま体制を立て直しいつでも攻撃できるぞとアピールしてくる。

「まさか小娘に止められるとはな」

「これでも一応高等科は卒業してるけどね」

「まあ、いい。悪いが引かせてもらう。これ以上の被害は御免こうむりたいんでな」

そういうと、盗賊の頭らしき人物は一目散にほかの盗賊達が逃げて行った方向に向かって走る。

「ちよっつま！」

思わず声が出た。追おうとする者の魔力をかなり消費してしまっているため正直きつい。動きも鈍る。

そうこうしている内に盗賊の頭らしき人物はかなり遠くに行ってしまうている。

そう思っていると急に立ち止まり大声をあげた。

「俺は『黒狼の牙』の首領・ドン＝ガリバーだ！覚えておけ！」

まるで捨て台詞だと思ったがいままさらどっしよつもない。

とりあえず今日のひとこと。

お約束ってあるんだね。

第03話「こんなお約束なことってあり得るんだ〜」（後書き）

主人公に殺しへの葛藤がないですね…。

まあ、主人公は結構達観してましてそこから辺の良心的呵責はほとんどないのかもしれない。

久々に長く書きましたね。戦闘描写もゴブリン以来です。

第04話「やっと着きました鉱山都市グレイバン」

盗賊の襲撃から数日。私たちは未だに平野を歩いていました。

都市と都市は結構遠いのは当たり前なんですが、ここまでかかるのはさすがにね。まあ、理由としては襲われたから警戒を強めるために少しゆっくり進んでるからなんだけどね。おかげで一回魔物に襲われたけど難なく倒しきることができた。

進行スピードから言ってあと一日くらいでグレイバンに着くらしいけど、本格的に暇だ。

とりあえず、グレイバンにいたら銀行行ってお金を引き出そう。っていうかこの世界に銀行なるものがあつたことに私はびっくりしてるけど。

この銀行はギルドが運営していて一般人でも利用することができる。どの支店でお金を預け入れても、どこでも引き下ろすことができる。私の知っている銀行とまったく同じシステムを持っていた。私はちよつとした事情からお金を大量に持つてるからその全部を預けてるんだよね。

だから、まずグレイバンにいたらお金を下ろしてから鉱石を買っていいこうかと思ってる。私の作ろうと思ってる武器を作るために必要な鉱石がどこまであるかはわからないけどとりあえず先立つものは必要だし。

そんなことで気がまぎれるはずもなく、私はこの後も退屈な護衛という仕事につきながらその日を過ごしたのだった。

次の日。

ついに私たちはグレイバンにたどり着きました。正直もつと早くつけるはずだったんだけど、盗賊の襲撃とかでこんなに遅れるなんて…。

まあ、無事着けただけでも僥倖かな。

グレイバンに入り、広場までくると父さんが皆にお金を渡す準備をし始めていた。

「おう、今日までありがとな。一応、報酬上乘せしとくからギルドで受け取ってくれ」

「はい、では失礼します。

君たちもまたな。今度も一緒に仕事をできることを祈ってるよ」

「はい。ありがとうございます」

そう言って、マルフィさん達は歩いて行った。

「ほら、お前たちにも」

「ありがと、父さん」

「おうよ。じゃあな」

そう言つて父さんたちも広場から散つていった。

何人かでたくさんのお買い物をするらしいです。がんばってほしいな。

まあ、いいや。

「ヴァン」

「ん？」

「買い物行くからついて来てくれない？」

「当たり前だろ？でも、先に宿を見つけときたいかな」

「ん、わかった。じゃあ、先に見つけとこうか」

「おう」

そうして私達は宿を探し始めた。

見つけた宿はそれなりに値の張る宿だった。っていうかこの都市の宿は基本的にちょっと高めだ。だって本来ここは人が余り来るような場所じゃないから高めになつてるんだよね。まあ、来るのは商人や鍛冶屋を営んでる人とかが多いし。

で、とりあえず荷物を置いて、私達は一緒に買い物に出かけた。部屋ですか？もちろん同じ部屋ですよ？

ギルドに行ってお金を下ろし、町に出て鉱石を売っている店を回る。

「ああ、これキスク鉱石！こっちはレヴラ鉱石！ああ、もうここは天国！？」

「すごいテンションだな」

「うん！だって、こんなにたくさん貴重な鉱石があるんだよ！鍛冶をやるものとしてこれはたまらないよ！」

テンションが上がりすぎてちよつとヤバい。

「アリアが笑っているならいいさ。俺としても鉱石には興味があるが、いかんせん免許を持ってないからな。俺は作るより使うだな」

「そういえばこの前の盗賊との戦いで剣が結構危ない状態って言うてたよね？」

「ああ。家にあったものだからな。最低でも2年は使ってるしな。手入れは怠ってはいないがそろそろ限界だな使っている感覚でわかる」

「じゃあ、私が作ってあげようか？」

私がそう言うとヴァンが驚いた顔をした。

「お前は免許を持つてるのか？」

「リアファール用の免許だって持ってるよ。だから、なんでも作れるぜ〜」

「お前はマジすごいな。最年少での取得じゃないのか？」

「うん、そつだよ。でも、秘密にしてね。わざわざ隠してもらってるわけだし」

「別に言わないさ。で、作ってくれるって本当か？」

「うん。剣でいいんだよね？」

「ああ」

「じゃあ、どんなのがいいの？斬るやつ？それとも叩き切るの？それともそれとも〜」

「普通のでいいさ。頑丈な奴のがいいかな」

「じゃあ、斬れる頑丈なのでいい？」

「やけにこだわるな」

「試験の時以来だからね。作るのが楽しみなんだよ〜」

「そつか。まあ、それでいいさ」

私は確認を終えると鉱石を買い始めた。

「ええつと、アイアン鉱石とギレルバ鉱石お願いします。後、ミス

リルと装飾用の金を貰えます?」

「ああ、良いぜ」

店の人に注文を告げる。

「どのくらい必要なんだ?」

「アイアンとギレルバが1・4バイン。ミスリルが600ティンで
ゴールドは100ティンくれます?」

「あいよ。おめえら!アイアン・ギレルバが1・4バイン。ミスリ
ル600ティン、ゴールド100ティンだ!準備しやがれ」

「「「はい!親方!」」」

「おめえさんは鍛冶師か?」

「はい」

「鉱石の選び方がいいな。気に入った。俺のこの炉を使ってくれ」

「え?いいんですか?」

「ああ、俺が持つてる炉は二つあってな。ここに来る冒険者にもた
まにいらんだよな使いたってやるがな。だけど、おめえさんには
俺が普段使ってる方を貸してやる。最高の武器を作るんだろ?」

「はい!ありがとうございます!」

こうして私のヴァンの創作が始まった。うまくできるといいな。

第04話「やっと着きました鉾山都市グレイバン」(後書き)

ブレイドガンナーはいつ出せるのでしょうか…。

このままいくと当分出ないかも…。

第05話「アリアの作った武器」

俺は目を疑ったぜ。

さっき俺の店で鉱石を買ってくれた嬢ちゃんに炉を貸すことにした。

普段であればぜってえにしねえことなんだが、嬢ちゃんが買っていた鉱石は明らかに特別な合金を作るためのものだった。

合金“ミルファリオン”。世の中にさほど出回らない最高クラスの金属である“オリハルコン”。これの性質をかなり劣るとはいえ再現したのが合金“ミルファリオン”。

鍛冶師の中でも相当ランクの高い者しか知らないはずのこの合金の調合率を剣一つ分だけ買った。俺もそれなりに名の知れた鍛冶師であると自分では思っている。

しかし、俺だっってこう言った合金を作るときは大量生産する。理由は簡単だ。量が少ないと失敗するのだ。特にミルファリオンは作ると元あった金属の質量よりも減ってしまう。だからこそ、少ない量だとその調整が難しくどんな自信のある鍛冶師だっって滅多なことではない。

だが、この嬢ちゃんは明らかにこの量で作れるという眼をした。

だから、俺は炉を貸した。この眼で見ても良かった。これほどの自信を持ち、鍛冶をする嬢ちゃんをみたいと思った。

そして、最初に言ったとおり俺は目を疑った。嬢ちゃんが作ったのは合金の評価基準で最高のSクラスの合金だった。ミルファリオンの評価基準の平均はCランク。だが、嬢ちゃんは難しいとされる少量での合金でSランクを作り上げた。

なぜ、ランクがわかるかって？簡単だ。色からすでに嬢ちゃんが作り上げたミルファリオンは違っていた。オリハルコンとほとんど変わらない光沢を発していた。

俺は、この嬢ちゃんに炉を貸したことをその生涯忘れることはないだろう。

これほどの腕を持つ冒険者に貸せたことは誇りになりえるのだから……。

* * * * *

ふう。こつやって金属を混ぜること事態が鍛冶師の認定試験以来だったから不安だった。

私自身がこつして武器を作るのは久し振りだ。

鍛冶師の認定試験は武器をひとつ作るというものと筆記試験だ。

その時以来、つまり5〜6年くらい前以来作っていなかった。でも、知識通りに合金“ミルファリオン”を作ることができた。

アイアン・ギレルバが1・4バイン、ミスリルが600ティン。ああ、バインは1・5kg、1バインは1000ティン。

比率的に言うなら7：7：3。これがミルファリオンを作る上で
の配合比率。

ハッキリ言ってミルファリオンはそこまで有名じゃない。オリハルコンを真似て作られたこの金属は所詮は紛い物であり、本物よりも相当劣っている。だから、制法自体がほとんどの文献に残ってなかった。ちゃんとした物を作るのも難しい。

だけど、この合金は通常の金属よりも遥かに強度が高く軽い。混ぜた時に何が起るのかは解らないけど質量がかなり減る。

だからこそ、私はこれで武器を作ろうと思った。

ヴァンがこの前まで使っていた武器は相当刃こぼれしていた。ヴァンの実力に対応できるような出来の剣ではなかったんだと私は思っている。

だから、強度が高くて軽いミルファリオンが思い浮かんだ。滅多に手に入らないような伝説級の金属があればいいんだけどあれらはものすごく高いしね。

私の作りたい武器にはそういった“金属”が必要だけどじっくり

集めて行ければと思ってる。だから、此処で買っておきたい金属はほとんどない。

まあ、そんなわけで、私はヴァンの武器をミルファリオンで作ることにしたのだった。

カーン！カーン！

甲高い音が鳴り響く。

最近売られている武器のほとんどはすでに鍛造ではなくて鑄造になってきている。鍛造で作られた武器はとても強くて丈夫。鑄造は大量生産に向いてるけどちょっともろい。

そんなわけで今私はミルファリオンを使ってヴァンの剣を鍛造に作っています。

柄の部分は店長さんが用意してくれるそうだから今作ってるのは刃の部分。シンプルな形の剣にしてるけど、軽さと丈夫さを兼ね備えた私の魂のこもった一振りだ。

カーン！カーン！

そろそろ作り始めて一時間位たつ。

鍛造はさつき言ったように強い武器をつくるのに向いている。だけど、その分作るのものすごい時間がかかる。

まあ、私としてはこうしてるのは結構好きだからいいんだけど。

「ふう、できた」

「おう、嬢ちゃんできたのか？」

「はい、柄の方は？」

「用意できてるが、大きさ合わせにゃいかんからな？」

「分ってます。持って来てくださいますか？」

「おう、いまもってくらあ」

そういつて店長さんは柄を取りに行った。

入れ替わりにヴァンが入ってきた。

「よあ」

「うん。どしたの？」

「いや、店長が出てきたんで終わったと思ったんだが、違うのか？」

「うんにゃ。終わったよ。正直、傑作と言っても過言じゃないくらの出来だと自負できるよ？」

「何故に疑問形なんだよ…。まあ、いいさ、ところでここに来たのはお前の武器を作る材料のためだろ？買わなくていいのか？」

「後で買うけど、主に必要なのは伝説の金属系統だからそう簡単には購入できないって」

「お前は何を作るつもりだよ？伝説は確かにすごいもんだが、使い勝手がいいわけではないだろ？」

「まあね。でも、最高のリアファールを作るためには必要だと思ってるよ？」

その言葉を聞いて、ヴァンが固まった。その後ろには柄を取ってきていた店長さんもいてもちろん固まっていた。あ、柄落としてる…。

「……お前、何を作るって言った？」

「リアファールだよ？もちろん免許も持ってるぜい」

「……。規格外すぎるぞアリア……」

「嬢ちゃん。それは嘘じゃないんだよな？」

「そうですね。何なら見ます？」

「いや、いい」

そんなにすごいこと言っただけかなあ…。

「それで、嬢ちゃん。伝説の金属を探してるんだよな？」

「まあ、そうですね」

「ちょっと待ってる」

そういつて店長さんが再び出て行った。あ、そろそろ、冷えたかな？

触ってみても大丈夫そうだったので水からだし、刀身を拭く。

「綺麗だな…」

「うん。まあ、このあと装飾入れるから大変だけどね。鍔もつくらなくきゃいけないしね」

私はそう言つて、ゴールドを出す。

この世界にある金属なんだけど、多くの金属が私のいた世界の英語読みで全く同じ性質のもだった。まあ、幻想金属もあるし、あつちになかったような金属も多くあるんだけどね。

炉に入れてしばらく待つ。出したら叩いて形を整えていく。

鍔は結構凝つたデザインにするわけでもないけどそれなりのものにしないとね。

鍔も完成し、柄を選んで剣をくみ上げる頃になって何か大きな箱をもって店長さんが戻ってきた。

「何ですかそれ？」

「アダマントタイトだ。お前にくれてやる」

思わず呆けてしまった。

呆けてしゃべれない私の代わりにヴァンが尋ねる

「どづいつことだ、店長さん？」

「嬢ちゃんが言っていたる。リアファールをつくるって。だから、俺が持つても使いそうもないこれを嬢ちゃんにやろうと思っただけ」

「いいのか店長？」

「ああ、こいつも使ってくれる人がいる方がいいだろ。俺だって使っただけでいい。こいつを使っただけで最高の武器を作れるほど若くはねえんだ」

「そうか。だが、ただでくれるというのですか？それは伝説レジェンダリの金属ですよ。普通に売れば相当な金になるのでは？」

「そうだな。そういうなら、原価の三分の一でいいさ。それでこれを譲ってやる。俺はタダでもいいんだがな」

「本当ですか！？」

私は店長さんの話を聞いて思わず大きな声を上げた。

「ああ、俺としても嬢ちゃんみたいなのに渡せるなら本望さ。で、原価の三分の一でいいかい？」

「もう、原価でもいいくらいです！」

「あ、ああ。わかった。で、剣はどうした？」

「もう出来てますよ？見ます？」

「見せてくれや」

私は出来上がった剣を見せた。

「思ったとおりだな」

「？」

私は店長さんが言った言葉の意味が分からなかった。

「どつという意味ですか？」

「俺の目は間違ってたってことだよ。完成品を見て確信した」

「そうですか」

「ああ、これなら悔いなくこいつをやれるからな」

「ありがとうございます」

私は頭を下げる。

「で、お前さんはほかに買っていくのか？」

「はい。では…」

そうして、私の初めての武器作りは終わった。

あ、ちなみに頂いたアダマントイトは亜空間に放り込んでますよ？
だって、あんな重いもの持って歩けないし。

第05話「アリアの作った武器」(後書き)

亜空間の説明に関しては次回しますので、ご容赦を。

「2011/08/04」テストが終わったので投稿再開します。

第06話「闘技大会ですか…」

あの後、店長さんに必要な金属言って、すべてを亜空間に放り込んで店を出てきた。

今度、空間魔法で自分専用の炉を作っておこうかな…。

で、今はヴァンと一緒に食事中。剣を作るのに結構時間かかちゃって、もう夜だ。

「そついえばだが、この剣の銘は？」

「ううん。ヴァンが決めちゃっていいんじゃない？私、名前とかつけるの苦手だし」

「そうか。じゃあ、考えとくか
ところで、先程の事なんだが」

「ん？」

「あの空間は何だ？」

「ああ、あれ？亜空間

一種の違う空間だね。一時的に空間そのものを作り出してるんだ。で、その中にもものを入れてるだけ。維持に魔力は必要ないんだ」

「そうなのか。じゃあ、そこに食糧とか入れておけばいいんじゃないか？」

「問題がそこなんだよね。違う空間に放り込んでおくには変わらないんだけど、あの空間での時間とかが止まってるじゃないし空気とかもあるんだよ。だから、食糧とか入れておいても腐っちゃうし、忘れると大変なことになりかねないよ?」

「そうなのか、じゃあやっぱり必要な荷物は持ち歩くしかないのか…」

「まあ、服とかなら基本的に大丈夫だし、必要なもの以外は入れておけばいいんじゃないかな?」

「そうか、じゃあそうするか。」

「で、話なんだが店長さんの話に乗るか?」

店長さんの話。それは私がアダマタイトをもらい、必要な金属類を買った後の話だ。

* * * * *

「闘技大会ですか？」

「ああ、6か月にフィアナの防衛都市・コーンウォールで行われるんだ」

「それに出るってか？」

「違うよ。その大会の優勝者には伝説レジェンダリの中でも最高クラスの逸品である色金の一つ緋々色金ヒヒイロカネがでるそうだ」

「それってほんとですか!？」

私の作りたいたっている武器には絶対に必要であるヒヒイロカネが優勝賞品として出るなんて。

「でも、なんで金属何ですか？」

「伝説レジェンダリは特別だからな。欲しがる奴はいくらでもいるんだ。最高の武器職人にそれを使って作らせるのが、半ば常識になってるな」

「そうですか。情報ありがとうございます」

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

そんな訳で私達はそれに出るかどうかを話し合っていた。

「乗ろうかなと思ってるよ？」

だって、ヒビイロカネなんて簡単には手に入らないもの。しかも、すごく高いし」

「そうだろうな……。だが、勝てるのか？」

「さあ？でも、勝てるように戦えばいいんじゃないのかな。やり方一つで変わるんだし」

「まあ、そうなんだが……。お前の実力はどうなんだ？」

「私？ううん……。そうだね、アヴァロン学芸都市の戦闘科を卒業してるくらいだよ？」

私は真実をちょっとぼやかした。本当のことなんて言えないしね。

ちなみにアヴァロン学芸都市とはこの世界での最高の教育機関でアヴァロン学芸都市の卒業者にはほぼ将来が約束されていると言われている。

そこを卒業したというのだから納得せざるを得ないだろう。

「そうなのか？全く、お前には驚かされる……。まあ、いい。おれもあそこにはお世話になってる。うまくいけばどちらかが優勝でき

「るだろ」

「そうなんだ。そうだね。じゃ、参加する方向で
それで、今後はどうするの？」

「コーンウォールを目指しつつ、依頼を受けてくのがいいんじゃないか？」

「そだね、そうしようか」

「じゃあ、方向性も決まったし、行こうか」

「ああ」

こうして私達はグレイバンを旅立った。

第06話「闘技大会ですか…」（後書き）

短い……。

これで2章は終了です。

次章は地球での話にするつもりです。

第00話「修業をしましょう！」

修行。それは、自らを鍛えさらなる高みを目指し行うものである。

「そんなわけで修業をしましょう」

あれから数日、私は皆の前でそう宣言した。

「どういふことかちゃんと説明を入れてからって欲しいのだがな、杉浦氏よ」

巖太の言葉にうなずき私は説明を開始する。

「前に話した通り、茉莉ちゃんに会いに行くためには異世界に行く必要があるんだよね」

「うん。そうだったね。それでどうして修行の話につながるんだ？」

「だって、その世界には魔法があるんだもん。魔物もいるし何もできなかつたら死んじゃうよ？」

私の言葉に3人は目をキラキラとさせる。まあ、3人ともオタクなわけだからそう言うシチュは好物なのかな？そう言う私も人のことは言えないけど。

「で、どうするんだ？魔法の練習でもするのか？」

「そうね。こっちの魔法があつちでも通用するかはわからないけどやってみる価値はあるかな？」

今は、そこらへんの調査のために行った人の帰還を待っているところだ。今日できるのは、皆の進む方向性を決めるだけだ。明日には調査に行っている人を戻すためにゲートを開けるらしいし。

「こちらにも魔法はあるのかね、杉浦氏」

「あるよ？私の家はそう言ったものを管理する国の機関のトップだし」

魔法や陰陽術といったものをまとめ管理するのが家の今の仕事。将来は私もこの仕事に就く予定。

「では、今日はどうするのかね？」

「皆はどういう風に戦いたい？まあ、ある程度は適性を見て方向性を決める予定なんだけど……」

「僕は、魔法で戦ってもみたいけど、前に出て戦いたいかな。魔法戦士って感じかな？」

「涼歌はそれでいいと思うよ。もともと、動くの好きみたいだし、適性もあるよ」

「俺も、そんな感じがいいかな。でも、どちらかというところ攻撃メインで補助魔法かな」

「ギルバート君もそれでいいかな。問題はないはずだよ」

「自分は魔法を使ってみたい。ファンタジーに魔法は欠かせないか

らな」

「たぶん、大丈夫だと思うよ？じゃあ、方向性も決まったし、家でやってみよう」

そうして、私達の修行の日々が始まった。

第00話「修業をしましょう！」（後書き）

新章です。今回はファルテスト側の人の出番はないと思われれます。彼らの修行ですが、単純に覚えてひたすら強化する感じになりますのでかなり話としては単調になると思います。

まあ、事件やらなやらを起こして巻き込ませる予定ではいますがそういう描写は下手ですので期待しないでください。

第01話「柿崎厳太の修行1」

まずは自分からということでは杉浦氏に連れてこられたのは大きなシエルターのような場所だった。

「杉浦氏、自分はいったいここで何をやるんだ？」

「魔法の習得だよ。ちなみに厳太の修業は私が担当するね。よろしく」

「ああ、よろしく頼む」

杉浦氏はそう言ってまず自分を近くにあつた扉から更衣室のような場所へと連れて入る。

「一応、危険が伴うから防護服を着てね」

「了解だ」

自分はすぐさま着替えに入る。もちろん杉浦氏が出て行ってからだぞ？

着替え終わり更衣室を出るとすでに杉浦氏は準備万端といったところだ。ちなみに防護服ではなく巫女服のようなものを着ている。露出度が意外と高い。これはもう巫女服ではなく、巫女もどきのコスプレではないのか？まあ、問題はないのだが。

「待たせたな」

「うっん。私も今さっき来たところだし。よし、じゃあ始めよっか」

杉浦氏はシエルターの床に魔法陣のようなものを書き出した。

「魔法をもう実践するのか？」

「違うよ。敵太にはまだ魔法回路がないからそれを体の中に作る作業をするんだよ。はっきり言うと体を作り替えるんだよ。ちなみにものすごい痛みを伴うけど我慢してね？」

「わかった。では、やろうではないか」

すぐさま自分は魔法陣の上に立つ。すると杉浦氏は呪文らしき言葉を唱え始める。まあ、聴き取れはしないのだがな。

「敵太、やるから覚悟してね」

「うむ。来い！」

「彼の物に魔なる力の源をつくりしものを作り出せ。クリエイトマジックライン」

次の瞬間自分は大声を上げ、泣き叫んでいた。

痛いというレベルではない。体を引き裂かれているような感覚がある。全身に針を突き刺されているような感覚がある。体の内から弾け飛んでいるような感覚がある。全身に打撲をしたような痛みを感じる。ありとあらゆる骨を折ったような感覚がある。全身に耐え切れないような電気を流されているような感覚がある。他にもいろんな痛みが襲ってくる。

そう、まるでありとあらゆる拷問を一度に行ったようなそんな感覚だ。しかも、意識は飛ぶことがなく継続し続ける。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

脳はその言葉を吐き続ける。いや、その言葉以外の言葉を紡ぐことができない。

延々と続く痛みの中に何か光を見つける。それは暖かな光でまるで自分を表しているようなそんな感覚を覚える。

必死にその光を掴もうともがく。掴めない。

手を伸ばす。全身を使い這いずるように進む。それでもやっぱり届かない。

悔しい。虚しい。悲しい。色んな感情が生まれるが正の感情は一切浮かばない。

だが、諦めずに手を伸ばす。掴もうとして全身を動かし這いずり進んでいく。

そして、ようやく光の前までたどり着く。そして自分はその光を胸に抱くようにして抱き込んだ。

そして、意識は飛んだ……。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

目が覚めると知らない天井がそこにあった。

隣のほうを見てみるとギルバート氏と水鳥氏の姿があった。どうやら、自分と同じものをやり倒れてしまったようだった。

「あ、巖太。起きたんだ」

杉浦氏の声を聴きそちらを向く。

「やっぱりきつかった？」

「うむ、なんとというか、全身にありとあらゆる拷問をかけられたようなそんな感じだったな」

「うーん……。やっぱり感覚って人によって違うんだ」

ん？

「どういうことだ？」

「痛みが伴うのは全員一緒なんだけど最初だけでそのあとの過程は全く人によって違うの」

「なんと……。では、自分の痛みがずっと続く中に見つけた光を手取るというのは……」

「うん。かなり珍しいね。まあ、実際には一瞬の出来事ですぐに倒れちゃってるんだけどね」

意識時間の延長か。ふむ。なかなか興味深いな。

「これで、魔法を使えるようになるのだったな」

「うん。そのはずだよ」

「うむ。では、明日よりやるということか？」

「そうだね。今日からでもよかったんだけど、みんなきつそうだし明日にしようか。」

あ、そうだ。今日からしばらく家に泊まってね。集中して修業するにはそのほうがいいから」

「では、荷物を持って再びここに来ればよいか？」

「うん。使用人に送り迎えをさせるから」

「助かる。では、またあとでな」

「うん」

こうして、自分の修業初日は終わった。それにしても、あの痛み
の感覚は一生忘れないであろうな。

第01話「柿崎殿太の修行1」（後書き）

姉のゲームは極悪です……。が終わりましたので再開します。

第02話「ギルバート」レクティファールの修行1」（前書き）

「2011/10/12」精霊 聖霊に変更しました。

理由はヴァルテストの精霊の定義が違ってしまったためです。

設定資料に種族説明をしばらくしたら追加します。

第02話「ギルバート」レクティファールの修行1」

俺が連れてこられたのは道場のような場所だった。

ちなみに俺をここに連れてきたのは、俺の修行を担当するというメイドさんで未羅の専属メイドでありボディーガードであるらしい人で名前は月野梓ツキのあずなさんだ。未羅曰く「ものすごく強いよ。私の修行も見てもらったから」とのことらしい。安心していいわけじゃないけど、頑張れってことかな。

もう一つ言われたのは、「死にたいと思うかもしれないけど、絶対に弱気なことには言わないでね。メニューがひどいことになるから……」とのことだった。しかめ、目が物凄い遠くを見ていたので正直何があるのか怖い。

「ギルバート様」

「は、はい！」

「自己紹介をしていませんでしたね。未羅様から聞いているかもしれませんが私が私は未羅様の専属メイド兼ボディーガードをしております月野梓と申します。ギルバート様の修行を担当させていただきますのでこれからしばらくの間よろしくお願いいたしますね」

「はい、お願いします。」

あ、俺はギルバート＝レクティファールです」

「はい、よろしく申し上げます。では、まずは魔法回路を作りましょうか」

「魔法回路？」

「はい、魔法を使うためには魔力を生成するための器官が必要な
です。それが魔法回路。ギルバート様の場合は大きな魔法は使わな
いとのことですが必要であるのは間違いないので、まずは魔法の習
得からしてもらいます」

「分かりました」

「では、準備をしますのでお待ちください」

そう言っつて、梓さんは床に魔法陣を書き始めた。

書かれている文字を見るとルーン文字でだった。やっぱり魔法つ
てルーンを使ったものなのかな？

「そうですね。ギルバート様は大きな魔法を使わないとのことなの
でルーンを使用したものを習得してもらおうと思ひまして」

「え？」

「見ておられたので、間違っていましたか？」

「い、いえ。その通りです」

「良かったです。まあ、此処にルーンが使われているからと言っつて
ルーンの魔法しか使えないわけではありませんが。では、準備がで
きましたのでお乗りください」

そう言われ、俺はすぐに書かれた魔法陣の上に乗る。

「始める前に聞かせていただきます。よろしいでしょうか？」

「はい」

「何故あなたは未羅様のわがままに付き合うのですか？こう言っただけなんですが、魂の持主だからと言ってそれは違う人間なので。危険を犯してまで付き合うことはないのではないのでしょうか？」

「そうですね……」

黙り込む。確かにその通りだ。危険が伴うことなんだ。そこまでして茉莉の魂の持主に会わなきゃいけない理由はないはずだ。でも

「未羅がそれを望んだからです」

「え？」

「未羅はたとえ記憶がないとしてももう一度会いたいと言いました。俺はあいつの友達であり、仲間だと思ってます。彼女なら俺達に言わずとも自分だけでやろうとすればできたんだと思います。でも、俺達に相談しました、だからです。俺達を頼ってくれた。だから、俺はあいつを手伝うんですよ」

ハッキリ言ってしまうえば、彼女の為にやるわけではない。これは自分のためでもある。それに嬉しかったんだ。あいつは普段、俺達に相談なんて一切しなかった。だから……、

「だから、これは自分のためでもあるんですから……」

「失礼いたしました」

梓さんがあやまってきた。

「え、何も失礼なことされてませんよ？」

「いえ、とてもぶしつけな質問をしてしまい、申し訳ありませんでした。あと、ありがとうございます。未羅様の友として仲間としていて下さって。今後とも仲良くしてあげてくださいませ」

「え、ええ、わかりました」

「では、改めまして始めましょうか」

「はい」

「始める前に注意事項です。この儀式には痛みが伴います。ですが、我慢していただけるとよろしいかと。後、痛みが通り過ぎた後に起こる現象に打ち勝って下さいませ。そうすれば、魔法を扱うための回路が生成されます。時間がかかってもよろしいので必ず打ち勝って下さいませ。では、始めます。心の準備はよろしいですか？」

「はい！」

そして、呪文が唱えられ始めた。

「では、行きます。」

彼の物に魔なる力の源をつくりしものを作り出せ。クリエイト

マジックライン」

そして、俺は異常な痛みを感じた。

全身を貫くような痛みだ。だが、それも一瞬だった。意識が閉じた。

次の瞬間、俺は全く知らない場所にいた。空が延々と続いている場所のようだ。見る限り空しかない。しかも、足元にはそれを映すかのような鏡のように輝く水が張られている。

前を見るとそこには少女がいた。

「へえ、ここに来る人がいるんだ。ようこそ、私の聖域へ」

「……」

「え、もうしかして知らなかったりするの？」

「ああ、知らない」

「ええ〜！？ちょっと待ってよ、あなた私のマスターになる人でしょ？なんで知らないのかしら！？」

マスター？なんのことだ？全く分からない。梓さんの話では戦いになるのではないのか？

「はあ……。まあ、いいわ。あなたは私のマスターになるのよ。ま

あ、私に勝ってもらわないといけないんだけどね」

「そうか。じゃあ、やるうか。と、言いたいんだけどさ」

「何よ？」

「戦えと言われても俺は戦えるような力なんて持ってない」

「はあ！もう、何なのよ……、こんなのが私の新しいマスターなの？」

「悪いね」

「別にいいわよ……。はあ、じゃあいいわ。あなたは何を望んで魔法なんて物が欲しいのかしら？」

「友達のためだよ。自分は感化されただけかもしれないね」

「いいのかしらそれで？一生を無駄にすることになるのよ？」

「そうかもな。でも……、友を大切に出来ない人間はだめだと思うんだ」

「合格」

「は？」

「だから、合格って言ってるのよー」

「なんで？」

「だからー！私があなたを強くしてあげるって言ってるの！」

私はね、確かに強い人にしか力を与えてこなかったわ。でもね、決して弱い人が嫌いなんじゃないわ。意志の弱い人が大嫌いなもの。

でも、あなたの意思はとてもしっかりとしていたわ。だから、私はあなたと契約するわ」

「あ、ああ」

「私は光の聖霊アストレイよ」

「ギルバート」レクティファーだ」

「よろしく、マスター」

「ああ、よろしく頼む」

俺はこうして、俺の生涯のパートナーと出会った。

ちなみに、この後に簡単な試練が待っていたんだけど、そっちはアストレイのおかげで簡単に終わった。

* * * * *

目を開くとそこは医務室のような場所だった。

「あ、梓。 Gilbertが目を覚ましたよ」

「未羅」

「うん。 気を失っちゃったみたいだね」

「 Gilbert様」

「はい……」

「無事でよかったです。 本来ならばすぐ起きれるそうなのですが、起きられないのですぐにここに運ばせていただきました」

そうなんだ。

「心配させてすみません」

「マスターが謝ることはないわ。 私のせいだし」

突然、アストレイが会話に入ってきた。

「って、アストレイ!？」

「何よ?」

「何って!」

「驚きました……。まさか、聖霊と契約しておられたのですか……」

「まあね。私もこんなのと契約するとは思わなかったけど、マスターの持ってた意思はすごいものだったからね」

「そうですね。では、今後の目標は決まりましたが今日はもう終わりにしましょう。後、今後の予定ですが、この家に泊まり修行してもらいます。集中して行いますので。」

「今から、あなたの自宅に送りますので準備してください」

「分かりました」

「あの私はどうすれば?」

「あなたはここに待機していただけると助かります。霊体化できるならばついて来ていただいても構いません」

「はい」

「こうして俺の修行初日は終わった。今後俺はアストレイと修行するぞうだ。今後どうなるんだろうな。」

第03話「水鳥涼歌の修行1」

僕は水鳥涼歌^{みずとりすずか}。僕が連れてこられたのは武道場だった。たくさん
の武道を嗜む人がいても余裕で入りきれerような大きさでこんな広
井場所でする必要があるのか正直分らないけどね。

僕を連れてきたのは未羅ととっても仲のいいというメイドさんで
新人だそうです。まあ、未羅の専属メイドさんの梓さんに鍛えられ
ていて相当の実力を持っているらしいので疑うようなことはない
だけどもね。

名前は波風瑠璃^{なみかぜるり}。僕の修行はすべて彼女の指導で行われる。ちょ
っとばかりおどおどしていて頼りない感じの子だけど間違いなく彼
女からは実力をもった雰囲気を感じることがができる。

「えっと、はい。では、今日からここでやります」

「はい」

「では、あの……その………」

「あの、もっと気さくで構わないよ?」

緊張でうまくしゃべれていない。

「年齢も近いようだしさ、もっと気楽にいかないか?僕は、堅苦し
いのは苦手だし、そう言う風に接されるのも苦手なんだ」

「はい、あの、数日すればたぶんなれるので………」

「分ったよ。僕のお師匠さん」

僕が軽く茶化すと顔を真っ赤にする。

「あ、あの、まず今日は魔法回路の生成をします」

「ああ、魔法を使うための回路だね」

「は、ハイなのです」

そう言いつつ瑠璃は床に魔法陣を書いていく。

「あの……これが回路生成のための魔法陣です」

「わかった。この上に立てばいいのかな？」

「は、はいです。で、では、始めますがその前にいいですか？」

「なんだい？」

「何で涼歌さんは未羅ちゃんのためにこんなことまでしてくれるんですか？」

「なんだ。そんなことが」

「え？」

そうまさにそんなことだ。だって、この質問の答えは一つしかないだろう。

「だって、彼女は僕の大切な友達であり仲間だからね。それくらい当然さ」

「そうですか……。未羅ちゃんは恵まれているんですね」

「君は違うのかい？」

「い、いえ。私は……」

「別に無理に言わなくていいさ。話したいと思ったときに言ってくれ」

「は、はいです」

そう言い、瑠琉は顔を引き締めた。

「では始めます」

そう言い、呪文のようなものを唱え始める。しばらくすると紡ぐのをやめ僕に向かって話しかけてきた。

「この儀式には痛みが伴うのです。ですけど、それも時間はかからないので我慢してください。それで、痛みの後に試練のようなものがあるのですがそれに打ち勝って下さい。いいですか？」

「ああ、いいよ。じゃあ、頼む」

「ハイです。では、

彼の物に魔なる力の源をつくりしものを作り出せ。クリエイト

マジックライン」

彼女が言葉を紡いだ瞬間に僕の全身に痛みが走った。でも、我慢できるレベルだ。そして、僕の意識は闇に閉ざされた。

気がつくところこそは石段の上だった。というよりも何処かの塔の上で目の前には石碑に文字が刻まれていた。

『汝、この剣を抜くものなりか？であれば覚悟せよ。彼の剣は誰の指図も受けず誰の意図も受け入れぬ剣なり』

僕の目の前には静かに存在している剣があった。まるで、主を待つかのように存在しながら誰にも使われないう矛盾を孕んでいる。

僕は剣に手をかける。しっかりと握る。

その瞬間、頭の中に声が響いてきた。

『汝我を求めるものなりか？』

「うん。そうだね。力を求めてここに来た」

『何故、我を求めた』

「魔法を使って戦う為に……」

『汝には覚悟はあるか』

分らない。でも……

「僕は迷わない。友達が困ってるんだ。助けられなくて誰が友達でいられるか！」

『良かろう。汝、我を使うことを許す。その力を存分に振るうとい。』

わが名は魔剣ディグラシア』

「僕は水鳥涼歌だよ。よろしく」

そうして僕は自分の武器を手に入れた。

この後、大量のモンスターみたいのが出てきたけど剣を振るって倒した。

最後のドラゴンはさすがにきつかったけど。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

目が覚めると、そこは医務室だった。医務室がある家って……と
思ったのは秘密だけだ。

「あ、目が覚めた？」

「未羅。最後は僕？」

「え？何で？」

「ギルバートと蔵太がいないからね。最初に魔法回路生成を行った
のは皆同じだと思ったんでね」

「すごいね。その通りだよ。あ、瑠琉。涼歌が目覚めたよ」

「すみませんすみません！私、まさかこんな！」

「落ち着け」

未羅が瑠琉の頭をハリセンで叩く。というか、そのハリセンどこ
から出したの？

「す、すみません……」

「いや、問題ないよ。気絶するもの想像通りだったからね」

「そうなの？」

「ああ、痛みには慣れてるけどやっぱり違うね」

「まあ、大抵の人は倒れるみたいだし」

「で、修行はどうだった？」

「ドラゴンを倒した」

「は？」

未羅が驚いてる。何で？

「まあ、いいわ。普通じゃそんなの出てこないんだけど……。何か手に入れたりした？」

「うん。魔剣を手に入れたよ」

「はあ……。 蔵太といいギルバートといい何でみんなこんなに非常識なのかな……」

「どうしたの？」

「蔵太は異常な量の魔力と魔法の特殊才能。まあ、本人は気付いてないし教えるつもりもないけど。それに頼らないように育てるかな。ギルバートは聖霊との契約。しかもその聖霊はかなり上位の聖霊で人型。」

あなたは魔剣を取ってくる……。もう、ありえないわ……」

未羅が頭を抱えている。

「まあ、でも育てがいがあるってことか。よし」

未羅はそう言って部屋を出て行った。

「あ、涼歌さん」

「ん？」

「えっと、今日からこの屋敷にと会っていただくことになるんですけどいいですか？」

「ああ、修行を集中してやるのかい？」

「はい、そうです。それですね、家まで送りますので準備してください」

「ああ、わかった」

こうして僕の修行初日は終わる。明日からも頑張らないと。

第04話「杉浦未羅の日記」

月 日 晴れ

今日から、皆の修行を始めようと思って自宅に招いた。

当初の予定通り3人には力をつけてもらわなければならなかったし、異世界に行くとなればそれなりの準備も必要になるし簡単にいくものでもない。

それに皆には死んでもらったら困る。だって、死んじゃった茉莉を探しに行くんだもん。何の為に行くのかわかってるからこそ無茶はさせられないし、皆には死んで欲しくないし。

ないし。

だから、今日から皆の修行を始める。

皆が選んだ修行は私が思っていたとおりだった。

涼歌とギルバートが前衛、私と巖太が後衛。

皆の性格からしてこれが最高の布陣だ。だから、普通に考えてただけど……。

とりあえず魔法を使えるようになってもらおうと思ったんだけど、さすが皆だね。生粋のオタク根性が身についてたよ。

巖太は異常なほどの魔力と魔法の無条件融合。魔法を融合するに

は結構大変な作業が必要なんだけど、その工程をすべて無視して作り上げる能力。^{コシクソフト}対立す

るはずの魔法でさえ無理や合成できるんだからその可能性は無限大にあるかも。教育方針としては魔法をひたすら覚えさせる。まあ、体作りも含めてね。魔法の無条件融合の

能力に関しては魔法をちゃんと扱えるようになってからかな。

ギルバートは聖霊を引き連れて戻ってきた。しかも光の属性を操る相当上位の聖霊。これで、ギルバートは最強の盾と矛を手に入れたも同然だ。聖霊はもともとハンパじゃ

ない力を持っている。彼らは自分の意志だけで魔法を発動しうるし危険極まりない。それと、契約したんだからすごいといえるけど、今後の教育方針は彼女との連携及び彼女

を操るすべを覚えてもらうことかな。

涼歌は魔剣を取ってきた。闇の魔剣ディグラシア。私でも知っているほどの有名な魔剣。神話等に出てくるものじゃないけど、裏の世界では有名になった魔剣。闇を完全に

操ることができて、なおかつ、剣としても相当優秀な剣なのだ。ハッキリ言ってギルバート同様に扱い方がめんどくさいかな。教育方針は単純に魔剣の制御と魔法の鍛練。ま

けんに関しては完全に使いこなせるようになってもらわないとね。

これで、方針は決まったかな。よし、明日からがんばろう！

月 日 曇り

正直樂觀視してたよ……。この3人……。生粋のオタクというよりも最強クラスのオタクだった。

何でかって？修行初日でなんで、魔法を使いこなしてる上に動きも完璧なのよ！

おかしいでしょ！

はあ。日記にこんなこと書いても仕方ないか……。とりあえず、事実を書き連ねよう。

まず、敵ただけど……。私が教えたことを片っ端から吸収。魔法の実習に入る頃にはオリジナルの魔法すら作り上げていた。

ギルバートは、何とかというか聖霊との連携が必要だと思っていたのは確かだけど、昨日契約して何で次の日には完璧な連携ができるのよ！

涼歌はまあ、許せた。あの魔剣には身体能力の向上も含まれてい
るはずだから、修行相手の瑠琉なんてすぐ超すだろう。ただまあ、
闇の操作だけはまだできていないみたい

で安心したけど……。

一応、調子づく前に鼻っ柱を折っとくのもいいかもしれない。私

一人で今の皆に勝つのは正直言っちゃなんだけど余裕だ。調子に乗って何か起こすなんて馬鹿らしいしその前になんとかしてしまおうとね。

私も一応は魔法使いだしね。プライドは高いのよ。

月×日 雨

今日は三人を相手に模擬戦をやった。

まあ、やり始めたばかりだけど調子づく前に叩いておこうかと思っ
ってね。

まあ、当然私が勝った。そりゃ、小さいころからやってるんだもん
そう簡単には負けられないわね。

私の戦闘スタイルは確かに相手にとってはきついものなのかもしれない
けどこれくらいさばけるようになってもらわないと。

と言いますか、3対1でしょ？もうちょっと善戦してほしかった
かな。

まあ、今後の修行方針は取りやすくなったから良しとするか。

月 日 晴れ

模擬戦から位週間近くたって3人とも動きがかなりきれいになってきている。

皆、ありえないくらいの才能の持ち主だから成長速度は早くて当たり前だけどね。

とりあえずの目標は3人で打倒私らしい。まあ、そう簡単に負けてあげるつもりは全くないけど。

月 日 晴れ時々雨

お天気雨が降った。

こういう日には大抵何か起こるからたまったもんじゃない。

まあ、逢魔ヶ時には実際に表れてくれたわけで……。仕事です、はい。

皆にはまだ早いからとりあえず付いて来てもらって見てもらいました。

見てもらった結果、皆さらに張り切ってくれた。修行には心も大切だから正直助かる。

ちなみに今日倒したのは大鬼。正直疲れたけどね。

月 日 雨

やっぱり皆天才だ。たった一日で敵を想定した戦い方に変わっていた。

実際に訓練と実戦は違うから訓練だけじゃダメなんだけど、実戦を目にしてどうすればベストなのかすぐに理解したらしい。

確かに、そのほうが助かるんだけど……。私たちいるいみあるのかな？

だって、ほとんど教えなくてもすぐに次の段階へ進んでいるんだもん。やりづらいつたらりゃありゃしない。

まあ、その分楽できるから別にいいんだけど。

月 日 晴れ

明日の午後、調査に行っていた人を戻すらしい。

時間はかかったけどこれで、茉莉のいる世界がわかる。

これで、逢いにいける。

楽しみだ。

とりあえず、早めに寝た。

第05話「調査員の帰還です」

「え？2年近くあっちにいた？どういうこと？」

私は梓・瑠琉と一緒に調査に行っていた人の話を聞いていた。

「私としてもびっくりしました。一か月後にゲートを開くとの話だったのですが、一ヶ月後経っても開いておらず、仕方なく待っていたのですが開いたのは2年近くたってからでした」

「と、言うことは……」

「はい。時間の流れが違ふと思われます。倍数でいうと18〜22倍ほどのスピードはあるかと」

「なんてこと……」

予定では茉莉は赤ちゃんでもっと簡単に見つけられる予定だったんだけど、完全に私の計算違いになった結果だ。というか、その結果は考えられた結果の一つだったはずなのに考えてなかった。

「まあ、幸いあちらで2年近く過ごしましたが私の年齢はこちらでの年齢に合うみたいですので実質一カ月分しか年取らないみたいですね」

「それは、本当に幸いですね未羅様」

「幸いかどうかは分らないよ。とりあえず、もう一つ聞きたいことがあるからね」

「何でしょう?」

「使えた?」

「はい。使えました」

「そう、よかった。じゃないと今やってることが全部無駄になるしね」

「そうですね。では、私はこれで。がんばってくださいね」

「ええ、悪いわね。私事に巻き込んで」

「いえ、未羅様の役に立てたのですから問題ありません。では、失礼します」

そう言って、調査員は帰って行った。

「はあ、どうしましょうね」

「どうしようも何もないのでは?」

「予定は全部狂ったよ。はあ、茉莉が転生してるってわかって浮かれて可能性の模索を全部放り投げてた私の責任だよこれは」

「未羅ちゃんは悪くないよ。やるべき事はハッキリしたんだし、卒業式まであと一か月近くだよ。がんばろうよ」

「そうね。はあ、まったく、私は何をしてるんだか……」

私はため息をつく。この事実を早くみんなに伝えて茉莉を探す旅はかなりきついものになるって伝えとかなきゃね。

「じゃあ、2人ともギルバートと涼歌へちゃんと伝えてね。じゃあ、今日の修行を始めましょう」

「「分りました」」

茉莉。絶対会いに行くから待っててね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4090u/>

ブレイドガンナー～転生少女の冒険譚～(仮)

2011年10月26日12時51分発行